



Kiyonori Kikutake: San'in and Architecture

菊竹清訓
山陰と建築

菊竹清訓 山陰と建築

Kiyonori Kikutake

San'in and Architecture



2021年1月22日[金] - 3月22日[月]

島根県立美術館

主催:

島根県立美術館
TSKさんいん中央テレビ
山陰中央新報社
SPSしまねグループ

特別協力:

情報建築
文化庁国立近現代建築資料館

協力:

学校法人 早稲田大学
国立大学法人 島根大学
独立行政法人国立高等専門学校機構
米子工業高等専門学校
あかるい建築計画、大成建設

助成:

令和2年度地域ゆかりの文化資産を
活用した展覧会支援事業



謝辞

本展の開催にあたりましては、以下の方々にご協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

秋吉浩気	加藤道夫	千代章一郎	福島加津也
浅田泰司	鎌田 潤	高橋菜生	藤井 愛
池田理哲	川向正人	高増佳子	古田 晃
石尾健太郎	菊竹三訓	田部陽子	古谷誠章
石黒唯嗣	菊竹 雪	多比良誠	松本千明
伊藤俊郎	木下沙耶子	田村 亨	三村夏彦
井上裕司	桐原武志	田良島哲	村井久美
猪花茉衣	来間直樹	豊田隆則	本橋 仁
植野彰規	郷原 実	内藤 廣	森田一弥
江角彰宣	小林みな子	永島仙二	森山秀子
遠藤勝勸	佐々木奈美子	西尾豊樹	八尾雅章
大野 浩	佐々木良太	根本友樹	山口俊浩
小椋弘佳	下田泰也	橋口博文	山本順三
長田圭介	斯波美智子	橋本敏和	山本雅夫
貝塚 健	菅原功太	長谷川逸子	山森 誠
加賀田正実	杉原功一	原田敬美	
鹿田健一郎	角奈緒子	原田鎮郎	
加藤薫樹	スミス睦子	平野 到	
加藤直子	瀬尾憲司	平山治郎	(50音順)

ごあいさつ

菊竹清訓(1928-2011)は当《島根県立美術館》(1998)の設計者です。若くして活動を始めた菊竹は日本各地で数多くの建築を設計し、山陰には出雲地方を中心に注目すべき作品が幾つも見られます。島根県庁近くの《島根県立博物館》(1958)が中でも最も早い作例の一つです。これに続く《出雲大社 庁の舎》(1963)は若い菊竹の労作で、これによって内外の建築賞を受賞し菊竹の名が広く知られるようになります。

松江や出雲の仕事によって出雲大社の建築に親しく触れる機会を得たことは、菊竹の建築とその方法論に決定的な影響を及ぼしました。また世界デザイン会議(1960)に際して川添登や黒川紀章らとともに結成したメタボリズム・グループの活動は、菊竹にとって自らの方法論の実践と検証に格好の場となりました。菊竹の方法論「か・かた・かたち」を設計のプロセスで言えば、「か」は構想的段階、「かた」は技術的段階、「かたち」は形態的段階に当たり、認識のプロセスは「かたち、かた、か」と進み、実践のプロセスは「か、かた、かたち」へと進むと規定しています。これは後に著書『代謝建築論 か・かた・かたち』(1969初版)として出版されます。

菊竹はメタボリズムを課題として精力的に活動を続け、《ホテル東光園》(1964)、《萩市民館》(1968)、《島根県立図書館》(1968)、《田部美術館》(1979)など島根県を中心とする山陰に多くの建築を残しました。また宍道湖畔の風景と美しい調和を見せる島根県立美術館は菊竹晩年の傑作と評価されています。菊竹が設計した山陰の建物に焦点を当てることは、菊竹建築の原点を振り返ることになるでしょう。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、貴重な作品、資料をご出品いただきました情報建築、文化庁国立近現代建築資料館をはじめとするご所蔵者の皆様、またご協力頂きました関係各位に心より感謝申し上げます。

2021年3月

島根県立美術館長 長谷川三郎

展覧会によせて

この度、故菊竹清訓没後10年の節目を迎えるにあたり、島根県立美術館において「菊竹清訓 山陰と建築」展が開催されましたことをお慶び申し上げます。

亡き夫菊竹清訓は、日本に誇りを持ち、日本をこよなく愛し、全身全霊をもって国土、環境づくりに取り組んだ建築家でした。その中で、豊かな風土と文化に恵まれた山陰地方では、地元の皆さまのご支援を基に、多くの建築に携わらせて頂き、《島根県立博物館》、《出雲大社 庁の舎》、《ホテル東光園》を初めとする、地域に密着した菊竹の代表作が生まれました。

各方面にわたるプロジェクトを研究・開発・推進した菊竹は、幅広い人々にとって何が益となるかを常に考えていました。例えば、海上都市、超高層ビル等、その時代には実現不可能と思われる構想であっても、“社会のニーズがあるならば、やがて必要な技術や制度は整う”という信念のもと、有意義だと感じたことを提唱し続けました。そして、平和で美しい日本を描きながら生涯を終えました。

本展覧会では、「建築」を通して菊竹の精神が語られています。これが明るい未来に向けての“つなぎ”の一歩ともなれば幸いに存じます。

誠に僭越ではございますが、ここに、島根県立美術館の皆さまをはじめ、「菊竹清訓 山陰と建築」展にご尽力賜りました多くの関係者の皆さまに心からの敬意を表し、ご挨拶申し上げます。

2021年3月

株式会社情報建築代表 スミス睦子

目次

ごあいさつ

5	菊竹と原風景
6	1章 スカイハウスと初期の作品 菊竹清訓略歴 1/1スケール模型 スカイハウスの屋根
12	2章 メタポリズムと未来都市の構想
15	3章 山陰の建築 模型制作について1 島根大学 コラム 田部長右衛門 模型制作について2 米子工業高等専門学校
26	4章 方法と作品 コラム 「か・かた・かたち」の方法論
31	展示室レイアウト
32	会場写真
34	菊竹清訓おもな作品年表
36	論考1 菊竹清訓の「設計仮説」と「うけつがれること」 —(島根県立博物館)(出雲大社 庁の舎)の設計と出雲大社 河野克彦
40	論考2 うけつがれてきた菊竹建築 山本大輔
42	オーラルヒストリー 遠藤勝勸編、長谷川逸子編、内藤廣編 聞き手:斎藤信吾
48	パネルディスカッションII 巨大は細部が宿すか?菊竹清訓の建築を、架構と加工の点から考える パネリスト:福島加津也、森田一弥、秋吉浩気 コーディネーター:本橋仁
53	インタビュー 江角彰宣、来間直樹、塚本二郎、斎藤信吾
55	関連事業一覧
56	出品目録
62	紹介建築目録

凡例

本書は企画展「菊竹清訓 山陰と建築」のカタログである。
掲載する作品の順序は、展示会の構成にあわせたが、
一致しないものもある。

作品データは、原則として、作品名、竣工年、所在地の順に記した。
解説には下記の通り末尾に執筆者のイニシャルを記した。

山本大輔(D.Y.)

河野克彦(K.K.)

展示資料については、巻末の「出品目録」に掲載した。

菊竹と原風景

菊竹が生まれた久留米は、当時日本一の米作地帯と言われた筑紫平野の中央部に位置し、筑後川の恩恵による肥沃な土地と水運によって農業の一大拠点都市であった。

菊竹家は久留米に650年以上続く旧家で、筑紫平野に広大な地所を擁する大地主であった。菊竹の祖父母は、子供の頃の菊竹を連れて、数日かかりで地所を検分して歩いたという。戦後の農地改革により菊竹家は地所のほとんどを失ったが、菊竹が幼少期に培った地主として素養は、《塔状都市》(1958)や《海上都市》(1958)など、菊竹が生涯をかけて探求した一連の都市的提案の源泉となった。

菊竹の生家は、8つの蔵がある大きな屋敷で、家族のみならず大勢の親戚や使用人が年中出入りしていたという。開放的な住居を四季の変化にあわせて建具や家具で仕切り、自在に住みこなす日本の伝統的な暮らしは、建築家としての菊竹の思想に大きな影響を与えた。菊竹は、生家にあった32帖の広間が、代表作《スカイハウス(菊竹自邸)》(1958)の原型であると語っている。

菊竹の生家のすぐそばに九州最大の河川である筑後川が流れている。筑後川は筑後平野の農業に恩恵をもたらす一方で「暴れ川」としても知られ、菊竹自身も少年時代に2度の水害を経験している。《鳥根県立博物館》(1958)や《国立国際会館設計競技案》(1963)など、菊竹の設計には建物を柱で空中高く浮かべた高床のデザインが多いが、その背景には脳裏に焼き付いた水害の光景があった。

早稲田大学に進学した菊竹は、戦時中、学園防衛隊の一員として大隈会館に寝泊まりしていた。大隈会館は大学創始者・大隈重信の旧居を転用した木造2階建ての建物だったが、1945年に空襲で全焼した。

焼跡に残った暖炉の煙突を目にした菊竹は、暖房のための一つの設備であるにもかかわらず、建物の中心的存在として自立する姿に強い印象を受け、その姿を写真に取めて手に残した。

菊竹は建築の空間を問題にするとき、この焼跡の暖炉の光景をよく思い出したという。菊竹にとって、焼けてもなお「残る部分」こそが建築の最も基本的な空間でなければならず、焼跡の暖炉は、建築のどういう部分を残し、残すためにはどうすればいいかという問題の手がかりを菊竹に与え続けた。

(D.Y.)



久留米の風景／写真：アフロ



焼け残った大隈会館の煙突／早稲田大学図書館蔵

1

スカイハウスと 初期の作品



スカイハウス/1958年/撮影:川澄明男

1947(昭和22)年に早稲田大学理工学部建築学科に進学した菊竹清訓は、学生時代から、さまざまな競技設計に参加して入賞を果たした。1948年には「広島平和記念カトリック聖堂建築競技設計」で、学生ながら丹下健三(1913-2005)に次ぎ、前川國男(1905-1986)と並ぶ3等となり、頭角を現す。戦後の農地解放によって郷里の福岡県久留米市の実家が地所の多くを失い貧しい境遇となったことから、こうしたコンペにアルバイトのつもりで片っ端から応募していたのだった。

菊竹は、1950年に早稲田大学を卒業し、竹中工務店、村野・森建築設計事務所勤務などを経て、25歳で菊竹建築研究所を設立する。当初は、同郷のブリヂストンタイヤの創業者・石橋正二郎(1889-1976)から依頼された木造の建物を改築する仕事を多く手がけた。そして、研究室として利用された木造の建物を移築した《永福寺幼稚園》(1956)などで「解体」「組み立て」の過程を経験することによって、木造による日本建築の更新性という概念を見いだすことになるのだった。また石橋の信頼を得た菊竹は、28歳で鉄筋コンクリート造の美術館(現・久留米市美術館)を中心とした総合文化施設《石橋文化センター》(1956)や《ブリヂストンタイヤ殿ヶ谷第一アパート》(1956)などを実現させた。

その後、菊竹は、建築における更新性と家族の年齢による変化を重ねることを試みた自邸《スカイハウス》(1958)を発表した。正方形のワンルームを4つのコンクリートの壁柱で高く持ち上げた《スカイハウス》は、発表当時から様々なメディアに取り上げられ、戦後の住宅史にその名を残す菊竹の代表作のひとつとなった。

(K.K.)

菊竹清訓

Kiyonori Kikutake (1928-2011)

- 1928年 福岡県久留米市に生まれる。
- 1947年 早稲田大学理工学部建築学科に入学し、在学中に「広島平和記念カトリック聖堂建築競技設計」(1948年)で3等に入選。
- 1950年 早稲田大学卒業。
- 1953年 25歳で菊竹建築研究所を創立(1962年、菊竹清訓建築設計事務所に改称)。ブリヂストンタイヤの創業者・石橋正二郎からの依頼で《石橋文化センター》(1956年)の設計のほかブリヂストン関係の建物を多く手がける。
- 1958年 自邸《スカイハウス》を発表し、日本の新しい住宅建築として注目を集める。
- 1960年 川添登、黒川紀章らとともに「メタボリズム」を提唱し、「世界デザイン会議」に参加。
- 1961年 「設計仮説」を発表。以降「か・かた・かたち」の設計理論を展開する。
- 1964年 《出雲大社 庁の舎》(1963年)の設計によって、アメリカ建築家協会(AIA) 汎太平洋賞、芸術選奨文部大臣賞、日本建築学会賞作品賞の各賞を受賞。
- 1969年 代表的な著書となる『代謝建築論 か・かた・かたち』刊行。

《塔状都市》《海上都市》からはじまる未来都市の構想に生涯を通じて取り組み、日本万国博覧会の《エキスポタワー》(1970年)、沖縄国際海洋博覧会の《アクアポリス》(1975年)など数々の博覧会でも活躍。

多くの建築を手がけ、《スカイハウス》(1958年)、《島根県立博物館》(1958年)、《出雲大社 庁の舎》(1963年)、《ホテル東光園》(1964年)、《都城市民会館》(1966年)、《萩市民館》(1968年)、《パサディナハウス》(1974年)、《田部美術館》(1979年)、《東京都江戸東京博物館》(1992年)、《島根県立美術館》(1998年)などがある。

学生時代の作品

1947-1949年

菊竹は幼い頃から絵が上手く、周囲から芸術的才能を認められていたという。建築家としても「早熟の天才」と称されることが多く、すでに学生時代からその才能に注目が集まっていた。

菊竹は元々は医者になりたかったと述懐しているが、早稲田大学の電気学科に進学していた兄の勧めで、絵の才能を活かせる建築学科に入学した。

学部2年の時に応募した《広島平和記念カトリック聖堂建築競技設計案》(1948)では、尖塔を持つ鉄筋コンクリート造の教会堂を中心に、将来的な更新を想定した木造の付属棟を広場の周囲に配置した案を提出した。後のメタボリズム建築を予見させるような菊竹の案は、前川國男や丹下健三といった第一線の建築家に混じって3等入賞を果たし、若き菊竹の存在を建築界に知らしめることとなった。(D.Y.)



広島平和記念カトリック聖堂建築競技設計案 透視図の下書き/1948年 情報建築蔵

石橋文化センター・美術館 (現・久留米市美術館)

1956年
福岡県久留米市

菊竹の郷里、福岡県久留米市を創業の地とするブリヂストンタイヤ株式会社が発立25周年記念事業として整備した総合文化施設《石橋文化センター》の中核をなす美術館である。

筑後川の氾濫で水害が多発していた久留米の土地柄に配慮して建物を高床形式の2階建てとし、正面に大階段を構え、メインエントランスや展示室、収蔵庫等の重要な室を2階に設けている。建設当時、展示室内はトップライトや木製サッシから自然光と外気が採り入れられていた。

ブリヂストンタイヤ創業者の石橋正二郎と親交があった田部長右衛門は、ブリヂストンタイヤ久留米工場視察の際に訪れたこの美術館に強く惹かれ、当時弱冠28歳の菊竹に《島根県立博物館》の設計を依頼することを決心したと言われている。

内外装とも時代の変化にあわせて当初の姿から大きく改変されているが、現存する菊竹の建築作品としては最初期の建物である。(D.Y.)



画像提供:久留米市美術館

永福寺幼稚園

1956年
福岡県久留米市(現存せず)

菊竹と同郷のブリヂストンタイヤ社長・石橋正二郎は、会社創業時に菊竹の祖父から資金を融資してもらった恩があり、建築家として駆け出しだった頃の菊竹に木造建物の解体・再利用の仕事を数多く依頼した。

《永福寺幼稚園》もその一つで、戦時中ブリヂストンタイヤ工場の研究室として使われていた木造平屋建ての建物を解体・再利用して幼稚園に用途転用したものである。

サイズの異なる既存の木製建具を再利用し、園庭側の出入口に大人も通れる戸口(掃き出し窓)と、子供しか出入りできない小さな戸口(腰窓)を交互に取り付けたことで、リズムカルで遊び心あふれる外観が生みだされている。

菊竹は、大学教育で全く教わらなかった木造建物の解体・再利用の設計に最初は戸惑ったものの、解体部材の扱いに習熟するにつれ、日本の伝統的な木造建築が、将来の増改築や移築を容易にするための「とりかえ」のシステムを持っていることを理解する。このときの経験が、後に社会の変化にあわせて有機的に成長する建築・都市を提唱する前衛建築運動「メタボリズム」(新陳代謝)へと発展していった。(D.Y.)



撮影:菊竹清訓建築設計事務所/画像提供:情報建築

ブリヂストンタイヤ 殿ヶ谷第一アパート

1956年

神奈川県横浜市戸塚区(現存せず)

大きな高低差のある敷地に建てられたブリヂストンタイヤの社宅である。

この建物では各住戸の独立性を高めるため、階段室を挟んで住戸が半階ずつずれるスキップフロア方式が採用されている。南側には縁側のようなサンルームが設けられ、障子や板戸の開閉によって採光や換気を調節できる。日本建築の縁側や木製建具から着想を得た外部環境の調節装置は菊竹にとって重要なテーマであり、その後も自邸《スカイハウス》(1958)の無双窓が組み込まれた雨戸や、《鳥根県立博物館》(1958)のルーバークウォールとなって繰り返し登場する。

また、玄関の下足入れの場所に悩んだ菊竹は、下足箱をサンルームのサッシから屋外に突き出して取り付けた。一見、苦肉の策とも思えるこのアイデアは、後に菊竹が「ムーブネット」と名付けた「とりかえ」可能な工場生産の設備ユニット(キッチン、浴室等)へと発展していく。

平面図に紙を上貼りして書き加えられた下駄箱が、アイデアの生まれた瞬間の臨場感を伝えている。(D.Y.)



撮影:
菊竹清訓建築設計事務所
画像提供:情報建築

スカイハウス

1958年

東京都文京区

東京・音羽通り近くの傾斜地に建てられた菊竹の自邸である。

その名が示すとおり4枚のコンクリートの壁で住居が空中高く浮かべられている。お堂のような屋根は単純なピラミッド型ではなく、「双曲放物面(Hyperbolic Paraboloid)」と呼ばれる曲面を四枚合わせた独特の形状を持つ。

住宅内部は柱のない正方形のワンルームで、四間四方(7.2m×7.2m)の主室の周囲に幅1.5mの回廊が巡り、主室の障子と回廊の雨戸に組み込まれた無双窓(可動式のスリット窓)によって自然光や風を調節できる。

主室の周囲には、「ムーブネット」と呼ばれる設備ユニット(キッチン、浴室)が回廊に突き出すように取り付けられた。ムーブネットは工場で量産され、家族構成や生活様式の変化に合わせて容易に「とりかえ」が可能な装置として考案された。《スカイハウス》に設置されたものは試作の域にとどまるものだったが、研究開発を経て1963年に日立化成工業などで量産が開始され、今日のシステムキッチンやユニットバスの先駆けとなった。

その後も子供部屋のムーブネットを主室の床から吊り下げるなど、階下のピロティ空間を中心に増改築が繰り返され、《スカイハウス》は菊竹の晩年に至るまでメタボリズム理論の実践の場であり続けた。(D.Y.)



撮影:川澄明男

1/1スケール模型 スカイハウスの屋根

設計

意匠 島根県 担当:山本大輔

構造 太陽工業株式会社 担当:鷹屋秀人

制作・設置

太陽工業株式会社、株式会社原商、有限会社寿テント

規模

屋根面積 104.04㎡ (10.2m×10.2m)

菊竹自邸《スカイハウス》(1958)は「菊竹プロポーション」と呼ばれる独特の寸法感覚を持った菊竹建築の原点であるが、現在も個人住宅として住み継がれており、一般者が内部空間を見学することはできない。そこで本展では《スカイハウス》の屋根の原寸大模型を制作し、実物と同じ大きさ、かたちの内部空間を展示したいと考えた。

実物の屋根は鉄筋コンクリートだが、今回の模型は仮設であること、屋根曲面の成形のしやすさからテント(膜構造)で制作し、天井内の鉄骨から吊り下げた。

四方に張られたスクリーンは壁柱を表し、床のカーペットの白い部分は主室、ライトグレーの部分は回廊

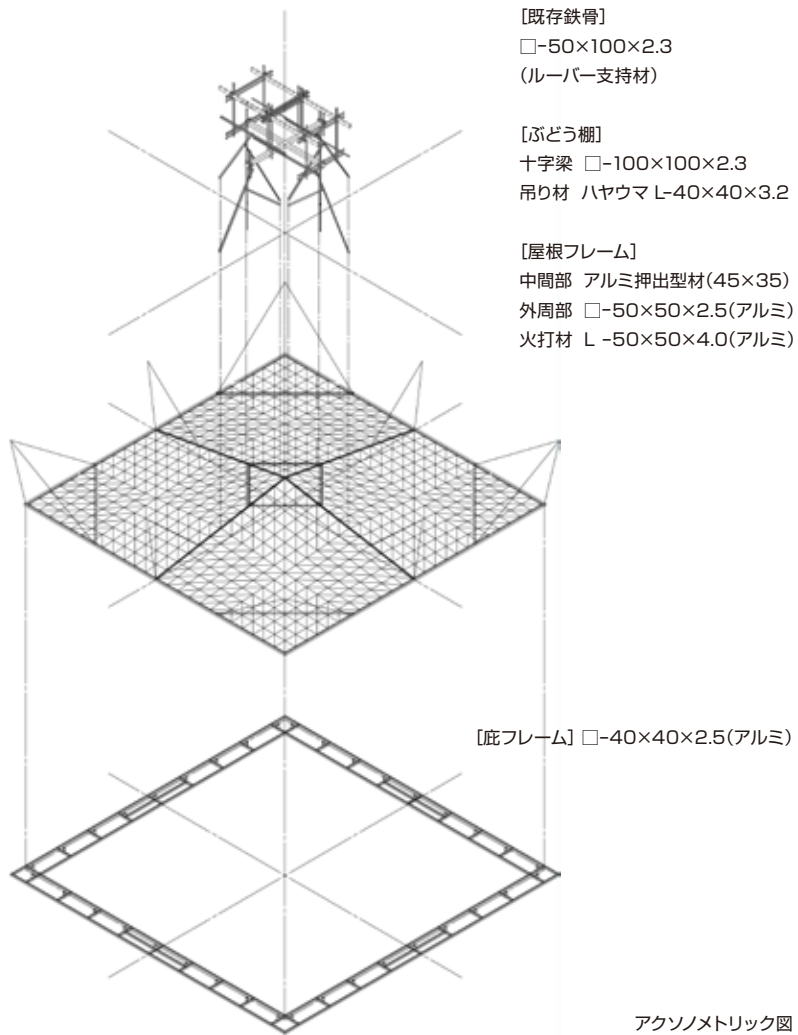
をそれぞれ表している。

菊竹事務所で副所長を務めた遠藤勝勸の回想によれば、テントは菊竹が特に好んだ素材であり、テントが《スカイハウス》のモチーフとなった可能性も示唆されている。

なお、この模型は実物と「寸法」が同じである以外は、「構造」、「材料」、「立地環境」など全て異なり、雨戸や障子などの特徴的な建具も省略している。

会場内に展示された設計図面や模型、写真資料を読み解きながら、鑑賞者それぞれの頭の中に《スカイハウス》の内部空間を再現してもらうことを意図した。





アクソノメトリック図



遠藤 この敷地は崖になっているでしょう。実は「擁壁に事務所を計画しなさい」というのが菊竹さんの最初の指示でした。コンクリートでできた擁壁の内側を上から掘れというのです。……更に驚いたのは、ご自身も「ここに住む」というので、「家の設計はどうされるのですか？」と私が聞くと、テントに住むから必要ないと(笑)。家はテントでいいけれど、その代わりプールがほしいとおっしゃいました。なので、当初の計画は事務所とプール、それに家として住むテント。この3つからスタートしました。

出典:遠藤勝勲・小川惇・菊竹雪・斎藤信吾・本橋仁
「家を作る図面 第9回変わり続ける住まいの計画 スカイハウス」
『新建築住宅特集』2018年4月号

2 メタボリズムと 未来都市の構想

建築評論家の川添登(1926-2015)は、1960(昭和35)年に東京で開催された「世界デザイン会議」において、建築家の菊竹清訓、大高正人(1923-2010)、黒川紀章(1934-2007)、槇文彦(1928-)、グラフィックデザイナーの粟津潔(1929-2009)、インダストリアルデザイナーの榮久庵憲司(1929-2015)を召集し「メタボリズム」を提唱した。日本独自の新陳代謝のできる新しい都市と建築の提案であった。

菊竹はここで、すでに建築雑誌『国際建築』1959年1月号(美術出版社)に掲載していた《塔状都市》、同2月号の《海上都市》と、《スカイハウス》などを発表した。《塔状都市》は人口が急増する都市部での土地不足による住宅問題に、《海上都市》は工場によって破壊される臨海部の保全という問題に答えるための構想であった。これらの構想は、初めは「解体」「組み立て」を都市的なスケールで取り組んだスタディであったという。

《塔状都市》、《海上都市》から始まる新たな土地を生み出し、豊かな環境づくりを目指す構想は、菊竹が生涯を通じて取り組んだ仕事となる。特に《海上都市》は、その後も研究と提案を重ね、1971年にはハワイ大学から招待され、ハワイで計画されていたアメリカ独立200年記念博覧会のための海上都市を建設しようとするプロジェクトに、専門家グループの一員として参加している。

また菊竹は1970年に大阪で開催された日本初の万国博覧会から、愛知での2005年日本国際博覧会(愛・地球博)まで、数々の日本の博覧会の建築計画に関わり、その中で、こうした構想の具現化に挑んだ。大阪万博では《塔状都市》の発展形としての《エキスポタワー》、1975年の沖縄国際海洋博覧会では《海上都市》の発展形としての日本政府館《アクアポリス》を実現させている。

(K.K.)



海上都市 模型/1962年頃/撮影:菊竹清訓建築設計事務所
画像提供:情報建築

メタボリズム


1960年5月に東京で開催された「世界デザイン会議」は、世界中から著名な建築家やデザイナーを招いた大規模な国際会議だった。運営会会長は足立正、実行委員長は坂倉準三、会議内容委員長は丹下健三、浅田孝が事務局長を務めた。

そして、この会議の準備期間中に渡米した丹下のかわりに、川添登が委員長代行として、その準備を進めることになった。川添は若手の建築家、デザイナーに声をかけ「メタボリズム・グループ」を結成する。彼等は、この会議で未来都市の提案をし、海外へ発信しようとしたのだった。「メタボリズム (Metabolism)」は、「新陳代謝」を英訳したもので、菊竹がこの英訳を考えたという。生物が「新陳代謝」をして成長していくように、建築や都市も変化していくようにデザインされるべきだという思想で、彼等は積極的に変化を促進しようとした。伝統的な木造建築などに見られる日本的な考え方を土台とし、世界に通用する論理として考えられたものである。

この時に発行された書籍『METABOLISM/1960—都市への提案』は、菊竹清訓の「海洋都市」が大きな部分を占めている。またこの会議の際に自邸《スカイハウス》を訪れたアメリカの建築家ルイス・カーンと、菊竹は方法論について議論をし、自身の方法論についての考えを深めることとなったのだった。(K.K.)

代
謝
更
新

菊竹

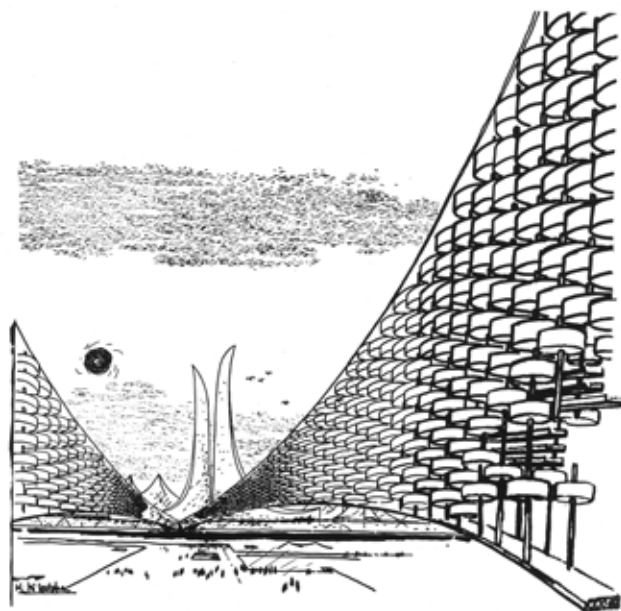


海上都市

海に浮かぶ都市を、菊竹は1958年からさまざまな形で何度も構想している。その最初の提案では、「海洋文明」が「大陸文明」と対比されて論じられている。これまでの「大陸文明」の歴史は土地を巡る闘争の歴史であったとされ、それに代わる人類の希望として「海洋文明」が想定されたのだった。総合的な技術力と経済力が結集されて初めて建設される《海上都市》による「海洋文明」が、アメリカとソ連が対立する現代世界の「大陸文明」からの解放となるのである。

こうした構想を考えたひとつのきっかけは、ソ連による世界初の人工衛星打ち上げ計画「スプートニク」だったという。技術力を結集した人工衛星の成功は、菊竹に未来の都市をつくるために協同する組織と、新しい社会の秩序の可能性を確信させたのだった。

その後、菊竹は《海洋都市うなばら》(1960)、《東京湾計画》(1961)、《ハワイ海上都市》(1971)といったさまざまな海上都市を構想した。(K.K.)



海洋都市うなばら/1960年/画像提供:情報建築

未来都市の構想

《塔状都市》(1958)を構想した当時の菊竹の目には、東京という都市が混乱の極に達しようとしていると映った。こうした現実に対して菊竹は、《塔状都市》により「住む」ことの新たな秩序を示そうとした。《塔状都市》によって新たなコミュニティが実現し、またその垂直の壁面は、自由な都市開発に立ちだかる土地所有権の問題を解決する「人工土地」となる。

その後、東急電鉄田園都市線沿線の多摩丘陵に建設する都市の計画に参加し、《ペアシティ計画》(1966)を発表している。3種類の拠点とネットワークを構築し、その後の自発的な開発を促そうとした「チャンネル開発」と呼ぶ独自の都市計画理論によるもの。《塔状都市》と同じ地上300メートルの高さの住居塔「ペアシティ・タワー」のある約5000haにおよぶ都市の計画であった。

《ペアシティ計画》をきっかけに、菊竹清訓建築設計事務所では、《樹状住居》をはじめ、さまざまな集合住居を検討するようになる。こうした住居においては、いかに共有空間によるコミュニティづくりに配慮するかが問題とされたのであった。また菊竹は、通産省の支援によって工業的に「人工土地」を創出する《層構造モジュール》(1972～)の研究開発を約20年にわたり行った。

(K.K.)



スパイラル住居/1990年頃
画像提供:情報建築

「ミスター博覧会」

1970年に開催された「大阪万博」で、菊竹は丹下健三の組織したプロデューサー・グループの一員となった。南地区を担当し、ランドマークとして建設された《エキスポタワー》で、《塔状都市》(1958)のアイデアを実現したのだった。また、ここで使われた立体トラスが、その後、《層構造モジュール》(1972～)の研究につながったという。

「沖縄海洋博」(1975)では、《海上都市》(1958)の構想が実現する。世界初の海に浮かぶパビリオンとして建設された《アクアポリス》のプロデューサー・グループに加わり、基本設計を行ったのだった。

「つくば万博」(1985)は、「メタボリズム・グループ」が参加し、全体計画、マスタープランを担当した博覧会となった。菊竹は、Bブロックの総合プロデューサーとして調整に当たり、外国展示館を設計している。続く「なら・シルクロード博」(1988)では、ハード・プロデューサーを務め、会場全体を膜構造の建築を中心にまとめた。

そして、「2005年愛・地球博」では、総合プロデューサーとして、原田鎮郎とともに会場のマスタープランを手がけ、《層構造モジュール》の発展形としての《グローバル・ループ》を実現させたのだった。

(K.K.)



沖縄国際海洋博覧会 アクアポリス/1975年 画像:沖縄国際海洋博覧会協会

3

山陰の建築

島根県松江市に県立の博物館を建設する計画を進めていた第23代田部長右衛門(後に島根県知事1959-1971)は、《石橋文化センター・美術館(現・久留米市美術館)》(1956)を視察し、博物館の設計を、30歳に満たない若き菊竹清訓に依頼することを決心する。

この《島根県立博物館(現・島根県庁第三分庁舎)》(1958)の設計に際して菊竹は、建築が「歴史のながれのなかで、いかにうけつがれてゆくのか、どううけつがれればよいのか」ということを、課題として捉えたのだった。さらに菊竹は、都市と建築との「空間機能的つらなり」への関心と同時に、「生活感情的なつながり」への関心について語っている。例えば、当時の松江の広告や看板の少ない様子を見て、こうしたものを必要としない「何かのつながり」を松江という都市が持っていると推測している。

また《島根県立博物館》の建設のため、1957(昭和32)年に島根を訪れた菊竹は、出雲大社に案内され、本殿の壮大な建築に強い印象を受けた。出雲大社について、「人間とのつながり」を残している「きわめておおらかな空間」であること、また完結し固定した空間ではない「変化を許容する空間」であることを述べているのである。この「異常に巨大な高床の木造高層建築」は、その後の菊竹の構想に大きな影響を与えた。

《島根県立博物館》以降、《出雲大社 庁の舎》(1963)、《ホテル東光園》(1964)、《萩市民館》(1968)、《島根県立図書館》(1968)、《田部美術館》(1979)、《島根県立美術館》(1998)など、山陰地方には菊竹による建築が多く建設された。

この章では、島根県の松江市と出雲市、鳥取県の米子市と境港市、また山口県萩市の菊竹による建築を紹介する。(K.K.)



ホテル東光園 1964年／撮影：根本友樹 画像提供：あかるい建築計画

島根県庁周辺整備計画

1958-1970年
島根県松江市

松江城三の丸跡地に建つ《島根県庁舎》は、先代の木造庁舎が失火により焼失したことから建設省管轄局の設計で1959年に建設された。

時を同じくして、田部長右衛門が主導した美術館建設運動が実を結び、1958年、県庁舎南側の旧副知事公舎跡地に《島根県立博物館》が建設されている。

その後間もなく県知事に就任した田部は、県政の主要施策としてこの2つの建物を核とした「県庁周辺整備計画」を推進した。整備にあたっては、「松江城周辺の歴史的景観との調和」をテーマとし、建築・都市計画の専門家や行政の要職者等による委員会を組織して広く意見を聴取しながら進められ、《県民会館》(1968)、《県立図書館》(1968)、《県立武道館》(1970)などが計画的に整備されていった。

これらの建物の設計者には安田臣、菊竹清訓の2人の著名な建築家が起用され、松江城と一体的な景観を形成することに成功している。

島根県庁周辺の整備計画は、建築・都市計画の専門家の間で高く評価され、1970年には日本の建築界で最も権威ある「日本建築学会賞(業績)」を受賞した。(D.Y.)



島根県立博物館 (現・島根県庁第三分庁舎)

1958年
島根県松江市

菊竹の山陰における第一作目となった建物。水害の多い松江の地域性に配慮し、白い箱状の2階部分(展示室)を、コンクリート打ち放しの柱で高々と持ち上げ、1階～中2階に吹き抜けのエントランスホールやバルコニーを設けて開放的な空間としている。この建物を空中に浮かべた高床式倉庫のような外観は、《スカイハウス》(1958)や《国立国際会館設計競技案》(1963)など、菊竹の設計した建築にしばしば見られる特徴の一つである。

建物外装の色彩計画は白と黒を基調とし、県庁庭園を挟んで向かい合う松江城周辺の歴史的景観との調和が図られた。

大手前通り側の2階には「ルーバーウォール」と呼ばれる可動式の縦格子が取り付けられているが、これは田部長右衛門からの「自然採光・自然換気の博物館」という要望に応えたものであった。矢羽根状の格子を回転させることで展示室内の明るさや換気量をコントロールするとともに、建物正面の外観デザインを構成する重要な要素となっている。

その他、バルコニー手すりなどのとりかえ可能なコンクリート製パーツや、随所に施された「葵」、「巴」といった和紋のデザインなどに菊竹の作風がよく表れている。

建設から11年後の1969年には、菊竹の設計で西側に新館が増築されている。(D.Y.)



撮影:高橋菜生

島根県立図書館

1968年
島根県松江市

松江城の堀川に面する県立の図書館である。

1966年、県庁の西側にあった松江刑務所が地元の強い要望で郊外へ移転したことから県が跡地を取得し、《県立図書館》と《武道館》が整備されることとなった。

《県立図書館》の特徴は、打ち放しコンクリートの外壁がジグザグに連なる外観である。この外観は、菊竹が「図書館の“かた”」と名付けたL字型の閲覧室を、堀川沿いに連結していくことで生み出されている。雁行した壁面が書院造のような伝統建築を想わせ、モダニズム建築でありながら松江城の歴史的環境と巧みに調和している。

また、窓の外に設けられた壁はガラス面に対して「45度」の角度が付けられているが、これは閲覧室内から城山の風景を眺めるとき、壁が最も視線の妨げになりにくい角度として導き出されたものである。菊竹は「45度」の角度をロビーの鉄骨梁や閲覧室内の照明器具の配置などにも適用し、変化に富んだ屋根の形状と内部空間を作り上げている。

このように、建築をデザインするための手がかりを見つけ出し、それを構造や設備など、あらゆる構成要素に波及させていく手法は、菊竹が設計した建築にしばしば見られる特徴の一つである。(D.Y.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

島根県立武道館

1970年
島根県松江市

県庁舎の西側に、「文武両道」をコンセプトに《図書館》と向かいあわせて建てられた《武道館》である。道場のある本館のほか、別棟で弓道場と相撲場が整備された。

左右対称の正面性の強い建築で、道場の上座に設けられた神棚を中心に空間が構成されている。

建物の最大の特徴は、道場の屋根を支える2本の大梁である。通常、建物の短手方向に梁を掛けるのが構造設計のセオリーだが、菊竹はあえて神棚へ向かって長手方向に柱間40m以上の長大なトラス梁を掛け、空間の求心性を強調した。

この大梁を菊竹は「装置梁」と呼び、照明、音響などの設備が自由に取り付けられるよう設計した。当初はロケットエンジンのような空調ノズルも吊り下げられていたが、現在は老朽化のため撤去されている。

建物の南北面には2階の道場を支える壁が立ち並んでいるが、この壁には《図書館》の外壁と共通の「45度」の角度が付与されており、外観デザインに統一感が生まれている。

《武道館》の裏手にあった鉄骨造の弓道場は、県の職員会館建設のため一度解体され、東へ2キロほどの場所に移築された。「メタボリズム」を標榜する菊竹建築が、実際に解体・組み立てを経て再利用されている興味深い事例と言えよう。(D.Y.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

模型制作について1 島根大学 《島根県立図書館》《島根県立武道館》

島根大学 学術研究院 環境システム科学系 建築デザイン学コース教授
千代章一郎

建築展の場合、建築の模型はそれ自体一つの作品である。ミケランジェロによるサン・ピエトロ大聖堂ドームの木製模型のように、あるいは伊東豊雄による《せんだいメディアテーク》のコンセプト模型のように、それ自体が建築作品の縮約版ではなく、建物に隠された建築家の思想を凝縮している。数多くのスタディ模型を制作しては壊していた菊竹事務所の模型の残骸が、建築模型と呼ぶに相応しいのであろうが、今日新しく制作するのであれば、それなりの菊竹建築の読み取りが必要である。島根県立図書館と島根県立武道館の制作では、まず屋根の架構表現を最も重視した。そこにこれら建築作品の魅力が隠されていると感じたからである。制作に取り掛かると、徐々に形になりつつある模型を借りてまるで菊竹自身が出現くるかのように、菊竹が描いた素描の真意が立ち現れてきた。図書館中央ホールとダイナミックに交差する閲覧室の構成、空気の流れをつくり出すかのような武道館のたたずまいは、制作にあたった研究室のスタッフとともに議論し、発見してきたことである。建築模型が鑑賞の対象ではなく、鑑賞者との対話のツールであることを制作当事者そのものが感じた次第である。

島根大学 総合理工学部 建築・生産設計工学科 千代章一郎研究室

菊竹が図書館と武道館において何を考えたのかを研究室内で議論しながら模型制作を進め、自分の設計した模型にはない「作りながら考える」というプロセスは非常に貴重な経験となりました。

～制作に関わったメンバーの感想・考え～

展示では屋根をかけず構造を見せていますが、屋根をかけると印象はガラッと変わり、菊竹建築の大きな特徴であると改めて感じさせられました。(荻)

斜めの壁柱が印象的で、武道の正面性を際立たせたのではないかと感じました。その複雑な造形表現には苦戦しました。(古澤)

武道館及び図書館の機能を充実させながら、独自のデザインを実現させていることに改めて驚嘆しました。模型制作を通じて、この場所はこうなっているのか、という発見が多く、大変価値のある時間を過ごしたと思います。(片岡)

県立武道館の複雑で大きな屋根が、柱ではなくコンクリートの壁と鉄骨で支えられているのを模型制作中に気づき、大変感銘を受けました。(小嶋)

規模が大きい分、鉄骨などの構造を意識して模型を作ることができ、意識していなかったところが明確になりました。(伊久)

図書館の模型制作中に敷地に対する理解や松江城への意識、機能に依らない直感的に美しい空間のデザインなど、菊竹さんの思考に少しだけ触れることができたような気がして嬉しかったです。(水田)

模型制作を通して素材を扱うことの難しさを感じました。主にバルサ材を用いましたが、気づいたら湿気を吸って変形し、修正することが多くありました。実際の建設時も同様に素材との格闘があったのではないかと思います。(植田)

私が力を入れた部分は図書館の窓枠です。くり抜く作業は集中力と体力をかなり消費しましたが、完成したのを見て、頑張って切って良かったと思いました。(藤原)

手を動かして実際に模型を作ってみて、図面からでは分からないスケール感や空間づくりの様子をリアルに感じる事ができました。(横山)

島根県庁舎別館計画案

1967年

島根県松江市(実現せず)

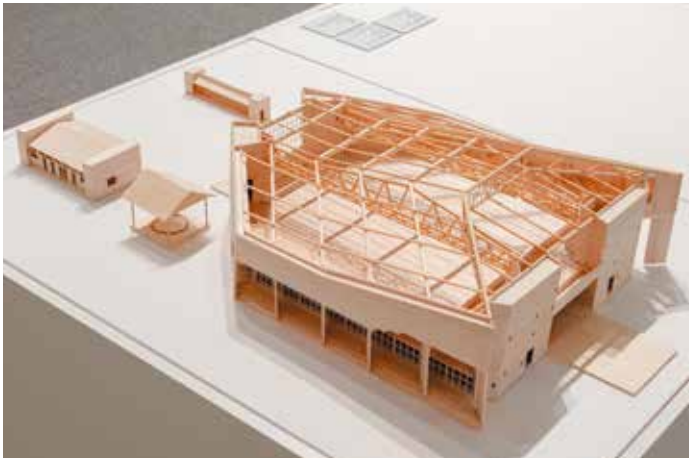
島根県庁周辺整備が行われていた当時、《県立図書館》と《県立武道館》の間の空地(現在の職員駐車場)に《県庁舎別館》を建設する構想があった。あくまで構想に過ぎない話であったが、菊竹は《図書館》の設計時から《別館》も含めたスタディを熱心に重ね、100m近い超高層ビルを県に提案している。日本初の超高層建築《霞が関ビルディング》(山下寿郎設計事務所 1968)もまだ完成していなかった時期に、菊竹が松江に超高層建築の機運をいち早く持ち込もうとしていたことは驚嘆に値する。

また、超高層の《別館》には、当時まだ国内に実例のなかった地域冷暖房のプラントが設けられ、県有施設だけでなく近隣のオフィスビルへの冷温水供給も計画されていた。実際に、プラントからの温水供給を前提とした床暖房配管が《図書館》のロビーに先行して敷設されていることから、《別館》建設に掛けた菊竹の本気度が窺える。

結局、《別館》は実現せず、《図書館》の床暖房配管も使われずじまいであったが、このようなエピソードからも「島根県庁周辺整備計画」が国内屈指の先進性をもって進められていたことが見て取れる。(D.Y.)



島根県立図書館 模型1:100 2021年 撮影:高橋菜生



島根県立武道館 模型1:100 2021年 撮影:高橋菜生

模型制作:

荻晋彦、古澤太晟、片岡千明、小嶋優実
伊久夢乃、水田日和、植田歩夢、田中遥香
藤原育子、横山公喜

材質:

床・壁:バルサとケント紙
柱・梁:ヒノキ角棒
屋 根:プラスチック



左:県立武道館、中央:県庁舎別館、右:県立図書館/画像提供:情報建築

島根県立美術館

1998年
島根県松江市

菊竹が晩年に手掛けた松江の宍道湖畔に建つ美術館である。菊竹は、宍道湖の「刻々と変化する渚」をデザインのモチーフとした。

優美な曲面を描く大屋根は、汽水湖である宍道湖からの塩害に配慮して耐候性の高いチタンで覆われており、その時々空の色を映し込んで表情を刻々と変化させる。大屋根の高さは、宍道湖周辺の景観に配慮して、対岸から眺めたときに背後の山並みを遮らないよう高さ15m程度に抑えられた。屋根に開けられた丸い穴は、宍道湖の景観を一望できる展望デッキである。

建物内部は、明るく広々としたロビーから展示室、ホール、レストランなど主要な室へ直接アクセスできる明快な平面計画となっている。

1階の企画展示室には、展望デッキに設けられたトップライトから自然光を取り入れることが可能であり、照度センサーと連動した電動ルーバーによって光量を自動で調節するシステムも備えられている。晩年まで一貫して自然採光にこだわり続けた菊竹の設計に対する姿勢がよく現れている。

(D.Y.)



田部美術館

1979年
島根県松江市

日本有数の山林大地主・田部家の茶道具コレクションを展示する美術館である。松江城の北堀沿い、武家地の面影が残る塩見縄手に位置し、敷地入口の長屋門は市の文化財に指定されている。

入母屋型の大屋根はコールテン鋼と呼ばれる耐候性の高い赤さび色の鋼板で葺かれ、かつてたたら製鉄で財を築いた田部家の歴史を想起させる。近隣の木造住宅と比べると建物規模は大きいですが、通りから目一杯引きを取った建物配置と、「お寺の本堂」のような日本人になじみ深いスケール感で、周囲の歴史的景観と巧みに調和している。

建物内部は収蔵庫が中心に据えられ、ロビーのスロープを介して展示室がらせん状に取り囲んでいる。ゆったりとしたロビーには開放可能なアルミサッシが取り付けられ、野点の茶会など前庭と一体的に使用できるよう設計された。

ロビーの吹き抜けには高窓が設けられ、北面からの安定した自然光が入り、前庭からの風が通り抜ける。《島根県立博物館》(1958)で打ち出された自然採光、自然換気へのこだわりをここにも見て取ることができる。

菊竹を生涯信頼し、《田部美術館》の設計を任せられた田部であったが、工事期間中に病に倒れ、その完成を見ることなく開館の2ヶ月前に逝去した。

(D.Y.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画



田部長右衛門

田部長右衛門(1906-1970)は、日本有数の山林大地主・田部家(島根県雲南市吉田町)の第23代当主である。

1959年に島根県知事に就任し、「後進性の打破」をスローガンに掲げ、道路、港湾などの社会資本整備をはじめとする県勢振興の基盤づくりを積極的に展開した。中でも菊竹が設計した《県立博物館》、《県立図書館》、《県立武道館》を含む島根県庁周辺施設整備は、田部県政の柱の一つとなった。

また、田部は文化・芸術を愛好し、特に松平不昧公ゆかりの茶道美術の保護に尽力した。不昧公好みの茶室「明々庵」の移築・復興をはじめ、地域に伝わる茶道美術品を私財を投じて保護・収集し、晩年《田部美術館》を設立して一般に公開している。

菊竹にとって山陰で最初の作品となる《島根県立博物館》(現・県庁第三分庁舎)は、田部が知事就任前から主導していた美術館建設運動が実を結び、建設されたものである。(補助金の都合で博物館として整備された。)

設計者の選定にあたって田部は全国各地の美術館を視察し、福岡県久留米市の《石橋美術館》に感銘を受けて同館の設計者である菊竹清訓に設計を依頼した。

《博物館》の設計を通じて田部と菊竹は信頼関係を築き、その後も《図書館》、《武道館》等のほか、《出雲大社 庁の舎》や《田部美術館》など田部が関与した民間建築の設計も菊竹が手がけ、島根県内に数多くの建築作品を残すこととなった。

(D.Y.)

出雲大社 庁の舎

1963年

島根県出雲市(現存せず)

出雲大社の境内に建設された社務所兼宝物館である。

先代の庁の舎が1953年に火災で焼失し、復興奉賛会長を務めた田部長右衛門の推薦で菊竹に設計が依頼された。二度と火災を繰り返さないという思いから、新しい《庁の舎》は神域内では初めて鉄筋コンクリート造で建て替えられた。

菊竹は、生家の米倉の内部構造との類似から出雲大社本殿を「米倉のシンボル」と解し、刈り取った稲を干すための「稲はで」を《庁の舎》のデザインモチーフとした。

《庁の舎》は、拜殿の西側に位置し、南北に細長い平面形状を持つ。菊竹は、橋梁工事に用いられるプレストレストコンクリート工法を採用して柱間40mの長大な梁を架け渡し、その下を柱の無いフレキシブルな空間とした。

正面のひな壇状のコンクリート部材は、神域内での作業工程を最小限とするため、工場で生産し現場で組み立てるプレキャストコンクリート工法が採用された。妻面の壁に張られたコンクリート製の「稲穂」のレリーフは、彫刻家・流政之のデザインによるものである。

最先端の建築技術を用いて、出雲大社の歴史的環境と調和する現代建築を生み出したことが、国内だけでなく海外からも高く評価され、その年の国内外の建築賞を総営めにした。(D.Y.)



撮影:菊竹清訓/画像提供:情報建築

出雲大社 神祇殿

1981年

島根県出雲市

《出雲大社 庁の舎》(1963)と向かい合う位置に建てられた宝物殿。「神祇」とは「神の助け」を意味する。

《庁の舎》と同じ鉄筋コンクリート造だが、銅板葺きの大屋根が特徴的である。大きく反り上がった棟(屋根の頂部)は、山陰地方の民家に見られる「反り棟」がモチーフだが、構造図を見ると《スカイハウス》(1958)にも登場した「双曲放物面(Hyperbolic Paraboloid)」のシェル構造で合理的に設計されていることがわかる。

深い軒に覆われた外壁は、打放しコンクリートにビシャン仕上げ(ハンマーで叩いて細かな凹凸を付けたもの)が施され、素材の質感が強調されている。外壁のコーナー部分が緩やかに突出しているのは、出雲地方に多く見られる弥生時代の「四隅突出型墳丘墓」から着想されたという。

内部のスロープを上ると2階が展示室となっている。反り棟の矢切り(両端の三角形部分)に設けられた高窓から展示室内に自然光と風を取り入れる設計となっており、菊竹の自然採光、自然換気へのこだわりがここでも見て取れる。

ステンレス製の簾を組み込んだサッシやアクリル製の扉引手などの優美なディテールに、菊竹が師事した村野藤吾の影響が色濃く現れている。(D.Y.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

ホテル東光園

1964年
鳥取県米子市

《ホテル東光園》は皆生温泉の老舗旅館である。

1964年の全国植樹祭で昭和天皇の宿泊所に選定されたことがきっかけで本館の建て替えが行われた。当時、《東光園》の作庭を手がけていた彫刻家の流政之と親交があった菊竹は、《島根県立博物館》(1958)の現場視察に訪れた際、流のすすめでよく《東光園》に宿泊していたという。その縁が元で菊竹が設計を手がけた。

外観には6つの「組柱」が空中高く立ち上がり、最上階の大梁を支えている。「組柱」とは、建物自身を支える主柱と、地震などの横揺れに耐える3本の添柱を水平材でつなぎ合わせたもので、その姿は国宝・厳島神社の海中に立つ大鳥居を想起させる。

客室階(5、6階)は最上階の大梁からPC鋼棒と呼ばれる直径わずか16～24ミリの高強度鋼材によって約4m間隔で吊り下げられている。スレンダーなPC鋼棒は化粧材で覆われると内装の造作木材とほとんど見分けがつかない。この特殊な工法によって客室内からコンクリートの巨大な柱型が消え、和の空間らしい繊細な意匠とスケール感が保たれている。

直下の4階は、5、6階が上空から吊り下げられ、その下に柱が1本もないことを誇示するかのよう全面が空中庭園とされ、日本海の手風が吹き抜けている。(D.Y.)



撮影:根本友樹画像提供:あかるい建築計画

境港マリーナホテル

1985年
鳥取県境港市

弓ヶ浜半島の米子空港近くに建つホテル。ここからの景観について、菊竹は「中海・日本海と大山という海と山を望む360度の展望はなかなか得難いし、出雲地方の夕焼けや境港や遠くの夜景も美しい。」と語っている。

鳥取県を開催地として行われた1985年の「わかとり国体」で、境港市がヨットレース会場に指定され、このホテルに隣接して公共のマリーナがつくられることになった。こうした状況からホテルの性格が固まってゆき、結婚式場と宴会場を備えたホテルとして建設された。

建設にあたっては、高層にするか低層にするか検討が重ねられ、最終的に鉄骨鉄筋コンクリート造の地上8階建ての「塔状」のホテルとなった。エントランスロビーとフロントのある1階と、2～4階の客室階は円形のフロア。5階はレストラン階で外壁が雁行している。張り出した6階は、四隅がカーブした正方形の平面で、眺望のため四方全てに窓が連続した、360度展望できる宴会場として設計された。(K.K.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

模型制作について2 米子工業高等専門学校 《ホテル東光園》

米子工業高等専門学校 建築学科教授 高増佳子

学生は、図面に加え、本校の課題で過去に作成された《東光園》の3Dデータを参照し、現地に足を運び、質問のため私の研究室を訪れながら制作を行った。1/100模型において、5、6階を吊り下げる構造は1mmのピアノ線を使用して表現している。しかし現実的には、模型上で床を吊り下げることは困難であった。(難しい構造の建築は、模型で作ることが出来れば実際に建築可能とも言われるが、)模型でも難しい建築を、《東光園》では60年近く前に実現しているのだという事実で改めて気付かされた。このたびの模型制作をとおし、鳥根大学と交流できたことも収穫であったと考えている。

米子工業高等専門学校 建築学科准教授 小椋弘佳

模型を制作した学生は、共に観覧した「菊竹清訓 山陰と建築」展で、図面ひとつひとつの解説をしてくれた。模型作りには図面を深く読み込む力が必要となるが、それが身につけていると感じた。特に、構造模型の制作においては、実際は見えないところまで立体的にイメージしたうえで、しかもそれらの要約を行わなければならない。構造的に大切な情報を抽出し、それを表現するという作業は、高度かつ複雑であったろうと思う。また今回は、《東光園》という、我々の地域の建築であったことも意義が高かった。知っているつもりでも、実は知らないことばかりであるということに気づかされたからである。

(2021年3月1日談話収録、要約/上野小麻里)

東光園模型制作後記

米子工業高等専門学校 専攻科建築学専攻 永田孝一

この度、構造模型を作成するにあたり、現地見学はもちろん、意匠図や既存の模型、雑誌の写真など、様々な資料を参照・分析しながら制作に臨みました。そうした中で、細部の寸法を拾ってヒノキを切断し、組み上げていく作業を繰り返していると、組柱の寸法や梁の位置、スラブの吊り鉄筋の位置などの構造部材のディテールにこそ、この建築の魅力が現れていると感じました。細部のディテールと、全体のプロポーションを横断しながら東光園を形作ったことが、現地見学のみでは気づけなかった建築の細部の魅力を理解することにつながったと考えます。制作を終えて、建築の細部に目を向け、自分たちの手で具現化することが設計者の意図を理解するのに最適な方法であると感じました。最後になりましたが、制作にあたり、多大なご協力を頂いた皆様、並びに建築の魅力を模型制作を通して教えてくださった菊竹先生に感謝を申し上げます。ありがとうございました。



模型制作：
永田孝一、西村亮佑、渡下宗太郎

材質：
ヒノキ、シナベニア、バルサ、
塩化ビニール、ピアノ線

ホテル東光園 模型1:100 2021年
撮影：山本大輔

萩市民館

1968年
山口県萩市

《萩市民館》は、菊竹と親戚関係にあった菊屋嘉十郎（萩市長 1959-1983）が、萩市の明治維新100年記念事業として建設した公共施設。萩は山口県東北部の日本海に面した地域の中心で、広い意味で山陰の一地区とされる。1604年に毛利氏が萩城を築き、街割をして以来、城下町として栄えた。《萩市民館》は、この城下町を建設する際の測量の起点である「街割原標石」のすぐそばにつくられた。菊屋市長によって、市の中心となる建築として計画されたことがうかがえる。

菊竹は《萩市民館》の設計について、「代謝空間」と「情報空間」という問題を語っている。代謝という考えから、建築の中心に「母屋」、そのまわりに副次的な「下屋」を配置し、また情報という問題から、切り離せないと考えたロビーとホールの大空間を大きな「情報天蓋」で覆ったのだった。天蓋は白い船舶用の塗装をした鉄板によるもので、船を想わせる。また大ホールと、小ホールおよびロビーのふたつの大空間にワイヤーにそって吊られた電球が星のように輝く印象的な照明デザインは、石井幹子によるものである。

(K.K.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

萩市庁舎

1974年
山口県萩市

萩市長・菊屋嘉十郎は、市制40周年記念事業として、再び菊竹に設計を依頼して《萩市庁舎》を《萩市民館》(1968)に隣接する同一敷地内に建設した。ここは周辺に明倫学舎や市の図書館などの公共施設が建つ萩市の行政と文化の中心となる地区である。菊屋は「萩市歴史的景観保存条例」を施行するなど、萩の伝統的な建造物と町並みの保存にも熱心な市長だった。菊竹は城下町の情緒の残る萩の町に非常に愛着を示していたという。

《萩市庁舎》の設計について、菊竹は、特に周辺環境との関係について語っている。当時の萩の木造低層の家並みと黒灰色の瓦によるスカイ・ラインを尊重して2階建ての低層の建築にしたという。さらに《萩市民館》との調和をとるため、下部構造をコンクリート、上部構造を鉄骨としている。一方で、萩の町並みの伝統的な素材に対する鉄とコンクリートという現代的な素材は、好対照をなしている。また《萩市庁舎》の茶色と《萩市民館》の白という色彩の対比も印象的である。

(K.K.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

4

方法と作品



国立国際会館設計競技案 模型/1963年/撮影:小山孝

菊竹清訓は1960(昭和35)年頃から設計とは何かという問題に直面し、独自の的方法論を構築し始める。《ブリヂストンタイヤ殿ヶ谷第一アパート》(1956)、《スカイハウス》(1958)、《島根県立博物館》(1958)など、これまで設計した建築について、「何から出発して、どういう問題をとりだし、どこで検討したか、どういう場合にうまくゆき、どういう時に失敗したか」について考えたという。

菊竹は、設計を三つの段階から捉えようとした。構想の段階の「か」、実体的な構造を明らかにする技術の段階である「かた」、形態の段階である「かたち」であった。それぞれの段階で、異なった問題が異なった角度で提出されることによって、設計が豊かになり、高められ、優れた解決が与えられると考えたのである。

菊竹は、この「か・かた・かたち」の三段階の設計理論によって自信を持って1963年の「国立国際会館設計競技」に臨んだ。未完の大作として知られる菊竹の応募案は次席の優秀賞となり実現されなかったが、同時期に竣工した《出雲大社 庁の舎》(1963)で、アメリカ建築家協会(AIA)汎太平洋賞、芸術選奨文部大臣賞、日本建築学会賞を受賞。1969年には、代表的な著書『代謝建築論 か・かた・かたち』を刊行し、丹下健三を追う建築家といわれ、その地位を確立していった。

この章では《パシフィックホテル茅ヶ崎》(1966)、《都城市民会館》(1966)、《東京都江戸東京博物館》(1992)など、自らの設計における羅針盤とした方法論とともに生み出された作品の一端を紹介する。

(K.K.)

国立国際会館設計競技案

1963年

京都府京都市(実現せず)

《国立京都国際会館》は、日本で初めての大規模な国立の国際会議施設。設計コンペによって設計案を募り、最優秀となった大谷幸夫の設計により、1966年に竣工した。京都市左京区の「宝が池公園」に隣接した比叡山を望む景勝地に建っている。195点の応募作品のうち、菊竹清訓案は大谷の案に次ぎ優秀作品とされた。審査報告書によると、菊竹案は、「全応募作品中最大の問題作として関心を集めた」という。

菊竹は、それまで不完全だった「か・かた・かたち」の方法論をまとめ、方法論によって設計をすすめるという新たな手法を試みた。菊竹の案では、ラウンジを中心に会議場を花卉型に配置することによって、会議の進展を促進することを目指している。また「同一機能を同一フロアにおく」という方針によって、代表団階、プレス階、傍聴階など、機能別のフロアがプランニングされた。さらに、プレストレストコンクリートとプレキャストコンクリートで、日本の伝統的な木造建築に見られる組物を模した井桁組の大架構による構造を提案したのだった。(K.K.)



撮影:小山孝

パシフィックホテル茅ヶ崎

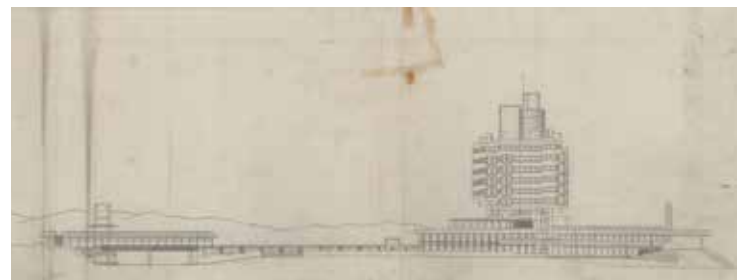
1966年

神奈川県茅ヶ崎市(現存せず)

湘南海岸にホテル、プール等による総合リゾートセンターをつくらうという構想により、建設計画がスタートした。西に富士山が見え、南には伊豆半島、東に江ノ島という場所にある広大な敷地は、極めて恵まれた立地条件だった。菊竹の最初の案は、室内プールをもつプラットホームの上に、テトラ型の90室のホテルがふたつ連続して建つものであった。その後、運営上の問題による度重なる条件の変化によって、初めの案を変更せざるを得なくなる。菊竹はこうした流動的条件に対処できる設計の「方法」について考えさせられたという。

菊竹は《海上都市》をモデルとし、プラットホームと「塔状」のホテルによって、この計画を実現した。ホテルの設計においては、パシフィックホテルをパシフィックホテルたらしめるところのものである基本的空間構造を抽出して、そこに焦点を絞って考えたという。また菊竹が「とりかえ」を想定した「ムーブネット」と呼ぶ浴室と洗面所のユニットを外壁に突出するようにとりつけているのも特徴的である。

サザンオールスターズの桑田佳祐は、同ホテルのボーリング場でアルバイトをしていたことがあり、2000年に発表した「Hotel Pacific」は、このホテルがモデルだといわれている。(K.K.)



パシフィックホテル茅ヶ崎 立面図 1:200/菊竹清訓建築設計事務所/文化庁国立近現代建築資料館蔵

都城市民会館

1966年

宮崎県都城市(現存せず)

都城市が市制40周年を記念し建設したホール。西都城駅近くの活気のある場所に建設された。市長は、建設のための予算が一度に多く確保できないため、何期かに分けて段階的につくることを考えた。菊竹の方法論を勉強した市長は、菊竹ならこうした段階的プロセスでも建築を完成させられると考えたという。中央に杭を集中させ、そこからの放射状の門型架構によって屋根を吊るという独特の構造を持つ《都城市民会館》は1966年に完成する。しかし、完成後に市長が交代し、その後に段階的に予定されていた工事が行われることはなかった。

設計にあたって菊竹は、建築のもっとも基本的空間である下部構造の主要部分は、「残る部分」と考え鉄筋コンクリートで構築した。これに対する「変わる部分」については、鉄の屋根、木の窓枠というように「とりかえ」しやすい素材が選択された。また菊竹は、「光と音と空気」を秩序づけるというテーマを設定し、自然の持つ統一をモデルに、照明、音響、空調の設備を放射状の門型構造と一体的にデザインしている。(K.K.)



撮影:根本友樹/画像提供:あかるい建築計画

パサディナハイツ

1974年

静岡県田方郡函南町

菊竹清訓建築設計事務所は、『新建築』1971年11月号の特集「都市住宅の再構築」において、「樹状」「板状」「塔状」「段状」「連続」「網状」「層状」という7つの住居の「かた」を提案した。菊竹の三段階の方法論のうち「かた」の段階までのスタディとされ、集合住宅の原型(プロトタイプ)として発表されたものであった。菊竹は、《ブリヂストンタイヤ殿ヶ谷第一アパート》(1956)の頃から、集合住宅の問題を考えるようになり、《ペアシティ計画》(1966)の頃からは、集合住宅が都市住宅の問題であることを自覚して、こうした原型となるものを研究してきたという。

《パサディナハイツ》は、このうちの《段状住居》が実現したものである。丘陵地帯の中腹に、セカンドハウスとして計画された120戸の集合住宅。傾斜地に建てられたもので地形に沿って蛇行し、斜面の勾配に沿って、各階はセットバックしている。また中央最下部には、住民共有のコミュニティ・ホールが設置されている。(K.K.)



撮影:塚本二朗

黒石ほるぷ子ども館

1975年
青森県黒石市

《黒石ほるぷ子ども館》は、児童図書の会社「ほるぷ」が、黒石市に寄贈した子どものための図書館である。津軽地方に多い土蔵をモチーフとして、鉄筋コンクリートの壁体の上に青森ひばの集成梁を架け渡して屋根を葺いた平屋建(一部中2階)、建築面積160㎡程度の小さな建築。菊竹は、用地の選定から関わり、小学校に近いりんご畑に面したこの場所を選んだ。

菊竹作品としては珍しい木造建築で、傷みややすい屋根の軒先部分だけを「とりかえ」できる工夫など、若い頃の木造解体・組み立ての経験が活かされている。菊竹作品の中でも最小の規模だが、内部には子どもが登れる磨き丸太の柱や、かくれんぼのできるカウンターなど、子どもの喜ぶ仕掛けに溢れている。開館中を知らせる屋根の「ほるぷレーダー」は彫刻家の伊藤隆道が、りんごのカーペットはグラフィックデザイナーの植松国臣がそれぞれ手がけた。

菊竹は、楽しんで取り組んだこの小さな図書館が、日本全国に建てられることを望んだ。《黒石ほるぷ館》は、菊竹にとって、「子ども館」の「かた」(プロトタイプ)の提案でもあったのだ。(K.K.)



撮影:山本大輔

東京都江戸東京博物館

1992年
東京都墨田区

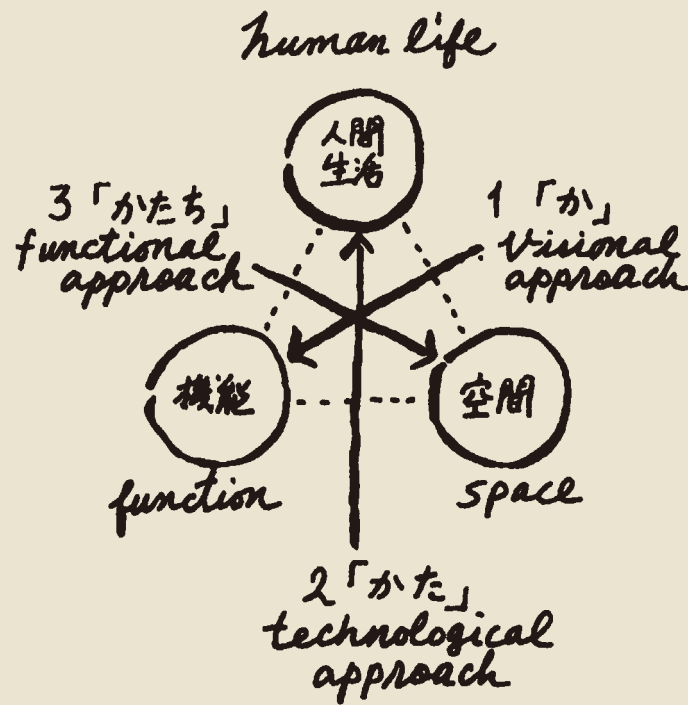
1987年、東京都が《国技館》横に建設を予定する《東京都江戸東京博物館》の設計者が、菊竹清訓に決定した。菊竹と黒川紀章、佐藤総合計画の3者が参加したプロポーザルで、菊竹の計画が選ばれたのだった。

この博物館は、主となる常設展示室とその下に収蔵庫を積層した上部空間と、ロビー、ホール、企画展示室、事務室といった主に普及情報・管理運営諸室を配置した下部空間を、4本の柱とエスカレーターで結んだ構成となっている。菊竹は、主となるひとつの展示室が持ち上げられたこうした構成を「積層一室型」と呼び、これを初原的なミュージアムの「かた」であると考えた。これは《島根県立博物館》と同じ「かた」でもある。ピロティは、天蓋を持つ「人工土地」の広場として計画され「江戸東京ひろば」と名付けられた。

このうち、展示室と収蔵庫の上部空間は、博物館の本質的な「残る部分」とし、ピロティや1階などの下部空間は、社会の要求に応じて「変わる部分」と位置付けている。(K.K.)



撮影:瀬尾直道/画像提供:東京都江戸東京博物館



設計の三段階構造

「か・かた・かたち」の方法論

菊竹は設計を三角形の構造として捉えた。三角形の頂点には、人間の物的環境の三つの側面、「機能」、「空間」、「(人間)生活」を置いた。そして、「かたち(形態)」は「(人間)生活」と「機能」から生み出されるものであり、「かた(技術)」は「機能」と「空間」との間につくりだされるものであり、「か(構想)」は「空間」と「(人間)生活」とのかかわり合いのなかで考えられるものであるとし、三角形のそれぞれの辺とした。また「かたち」は「空間」を問題とし、「かた」は「(人間)生活」を支持し、「か」は「機能」を志向すると考え、「か・かた・かたち」の基本構造を構築したのだった。こうした考えは、菊竹の代表的な著書『代謝建築論 か・かた・かたち』(1969年、彰国社)に表されている。

菊竹が設計の根本的な問題に直面したのは1960年のことだという。この年は、「世界デザイン会議」でルイス・カーンに出会った年であり、また《出雲大社 庁の舎》の設計に取り組んでいた年でもあった。実際に《庁の舎》が要求のはっきりつかめない建築であったため設計が大変難しく、それを切り抜けるために考えたのが、設計の方法だったと語っている。菊竹は、《庁の舎》の実施設計が終わった頃、「設計仮説」(『建築』1961年11月)によって「か・かた・かたち」の三段階の設計理論を発表した。ここでは「か」は「構想」ではなく「秩序」とされており、まだこの三角形の図は示されていなかった。

不完全だった「か・かた・かたち」の方法論をまとめ、この方法論によって事務所全体で設計をすすめたのが《国立国際会館設計競技案》(1963)だった。そして、その直後に発表された「設計仮説 現代建築への設計の理論」(『建築』1963年9月)では、菊竹は「か」に「秩序」とともに「構想」という意味を付け加え、三角形の構造も示したのだった。(K.K.)





菊竹清訓おもな作品年表

上野小麻里[編]

世の中の
うごき

1940

1945年 ボツダム宣言受諾、終戦
1946年 日本国憲法公布
1949年 中華人民共和國成立

1950

1953年 テレビ本放送開始
1956年 経済白書「もはや戦後ではない」
1957年 ソ連、人工衛星スプートニク1号打ち上げ

1960

1960年 国民所得倍増計画
1964年 東京オリンピック
1969年 米、アポロ11号初の月面有人着陸

1970

1970年 日本万国博覧会
1973年 第1次オイルショック
1978年 新東京国際空港(現・成田国際空港)開港

1944年 早稲田大学
専門部入学

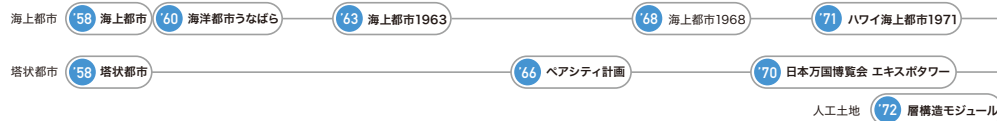
1947年 早稲田大学工学部入学
1950年 早稲田大学卒業 竹中工務店入社

1953年 事務所設立
1952年 村野・森建築設計事務所入所

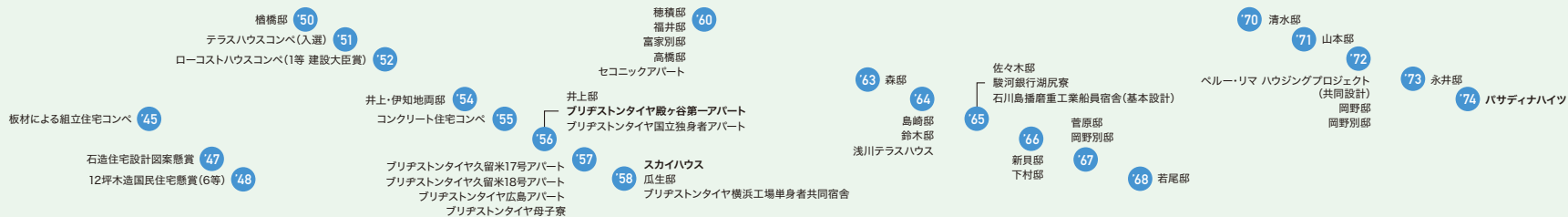
1960年 世界デザイン会議
1961年 か・かた・かたち論

1964年《出雲大社 庁の舎》により汎太平洋賞、日本建築学会賞作品賞、芸術選奨文部大臣賞

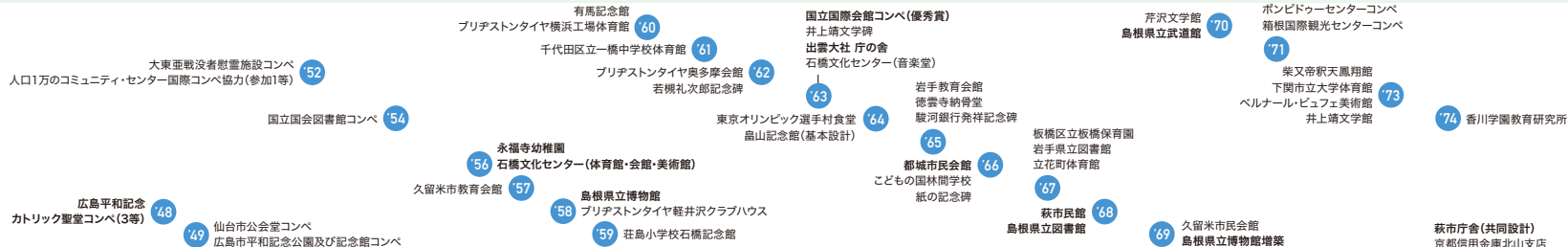
都市と研究および博覧会にかかわる事項



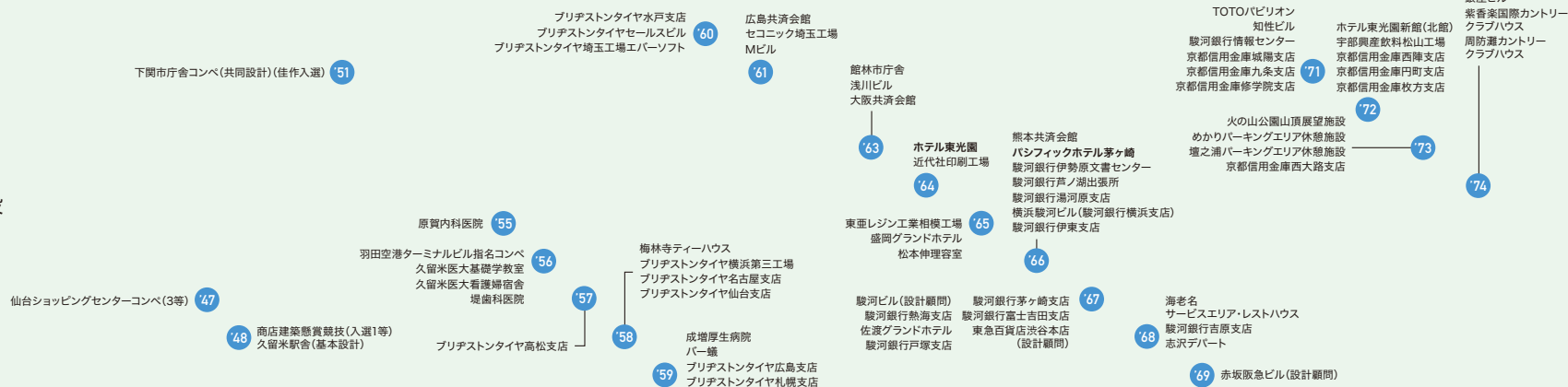
住宅



教育文化関連施設



業務商業関連施設



主要著書

1960年 共著「METABOLISM/1960—都市への提案」美術出版社
1961年 「設計仮説」「建築」15号青銅社

1969年 「代謝建築論 か・かた・かたち」彰国社

1980

バブル景気
1989年 チェルノブイリ原発事故
1989年 元号が平成となる ベルリンの壁崩壊

1990

1991年 ソビエト連邦崩壊
1995年 阪神・淡路大震災
1997年 イギリスから中国に香港返還

2000

2001年 米、同時多発テロ事件
2005年 京都議定書発効
2008年 リーマン・ショック

1980年《京都信用金庫コミュニティ・バンクと一連の空間計画の設計》により毎日芸術賞

1995年 工学博士号(軸カドームの理論とデザイン)
1998年 日本建築士会連合会会長

2006年 旭日中級章

'75 沖縄国際海洋博覧会 アクアポリス(共同設計)
KIC計画

'85 海洋情報都市開発研究会

モナコ海上都市 '92 '93

'94 相模湾海上都市

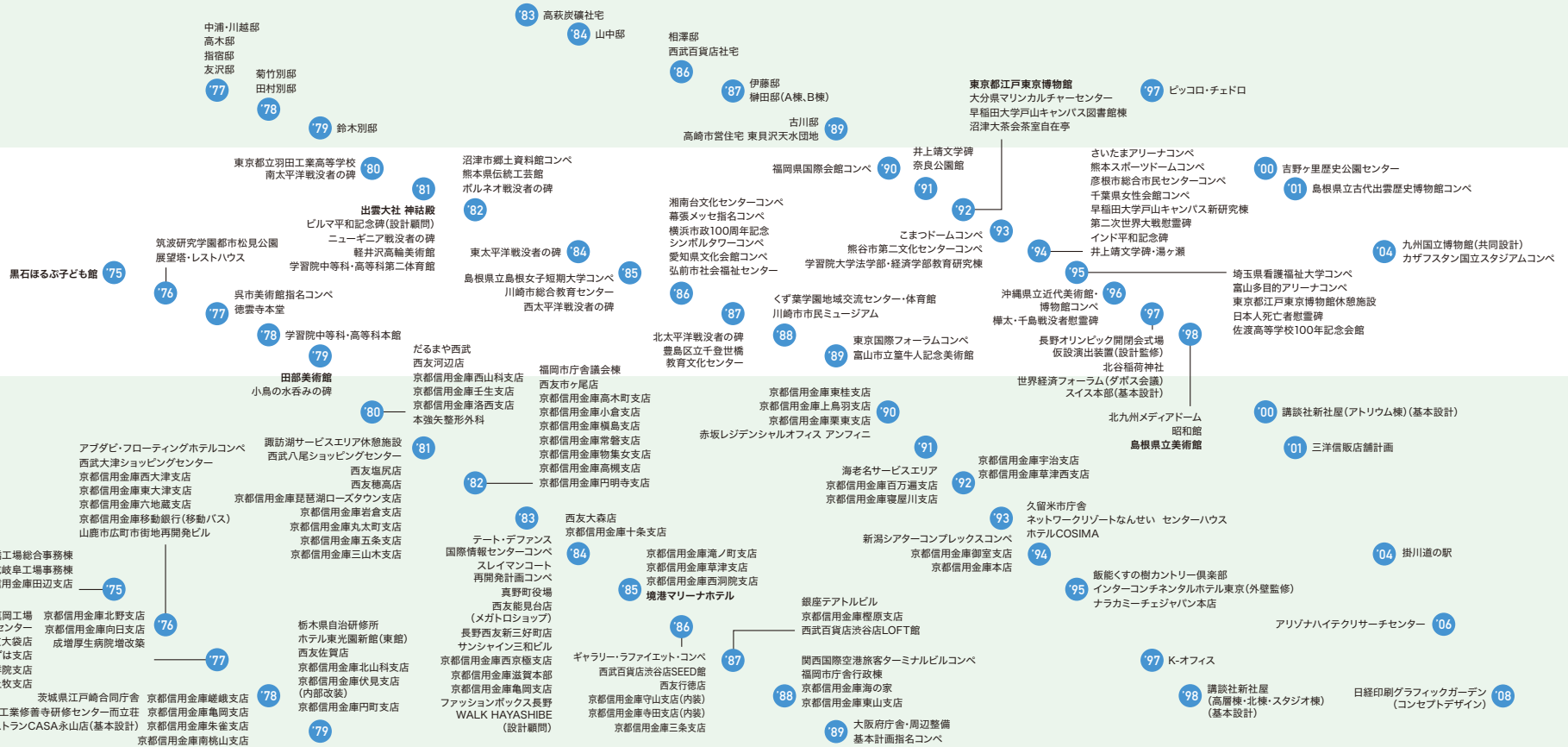
'94 ハイパービルディング研究会

'85 国際科学技術博覧会

'92 アマゾン・エコポリス計画

'05 2005年日本国際博覧会
グローバル・ループ(共同設計)

'88 なら・シルクロード博覧会 ロードサットオアシス物語館ほか



1973年『菊竹清訓作品と方法 1956-1970』美術出版社
1973年『海上都市』(SD選書;84) 鹿島研究所出版会

1978年 編著『菊竹清訓構想と計画』美術出版社

1990-1998年 編著『菊竹清訓作品集 1~4』求龍堂
1993年『現代建築をどう読むか 日本建築シンドローム』彰国社

2008年 復刻『代謝建築論 か・かた・かたち』彰国社

菊竹清訓の「設計仮説」と「うけつがれること」

—《島根県立博物館》《出雲大社 庁の舎》の設計と出雲大社

島根県立美術館 専門学芸員

河野克彦

はじめに

菊竹清訓(1928-2011)は、建築家としての活動の初期に、《島根県立博物館》(1958)の建設に携わった⁽¹⁾。この施設の設計のために島根を訪れた菊竹は、当時、出雲大社の第一次(拝殿)復興奉賛会の副会長でもあった第23代田部長右衛門(1906-1979)に、出雲大社を案内された⁽²⁾。その後、田部は島根県知事、そして第二次(庁の舎)復興奉賛会の会長となり、菊竹の設計による《出雲大社 庁の舎》(1963)が発表された。

《博物館》建設の40年後に、《島根県立美術館》(1998)を設計した菊竹は、開館の際に県民ギャラリーで自身の展覧会を開催した⁽³⁾。その「ごあいさつ」に、菊竹は、「私にとって出雲大社で考えたことが原点となったことを思い、感動のうちに、この展覧会を機会にその一端を示したいと考えました。」と記している。

本稿では、菊竹の建築設計の原点の一つとなった出雲大社についての考察と、建築についての当時の考えを、《島根県立博物館》と《出雲大社 庁の舎》および「設計仮説」についての菊竹の言説から、特に建築が「うけつがれること」に注目し考えてみたい。

1. 《島根県立博物館》と出雲大社

菊竹の設計した山陰で最初の建築である《島根県立博物館》は、田部長右衛門が主導した運動が実ったものであった。その経緯は下記のようなものである。

田部は、戦前から、松江市に美術館を建てたいという構想を持っていた⁽⁴⁾。その後、1952年に「財団法人松江博物館設立準備委員会」を発足し、本格的に博物館の設立運動を始めた⁽⁵⁾。1955年6月には、島根県知事・恒松安夫を招いて開いた「財団法人松江博物館理事会」で、理事長の田部は、知事に対して新たにづくりとする博物館を県立の施設として運営してもらいたいと懇請し、具体策が協議された。同じ年の10月には田部を会長として「島根県博物館建設促進委員会」が結成される⁽⁶⁾。

一方で、福岡県久留米市では、菊竹の設計した《石橋文化センター・美術館》

が1956年4月に開館した⁽⁷⁾。全国の博物館、美術館を視察した田部は、この美術館も訪れ、その「ムダのない設計、美しい外観、そして聞いてみると大変安い建築費に感心」してしまったと、後に語っている⁽⁸⁾。

1957年3月には《博物館》の新年度からの建設の見通しがつき⁽⁹⁾、田部は、島根県出身で《石橋文化センター・美術館》の運営委員会の委員も務めていた岩佐新(1894-1973)の紹介で、菊竹に《博物館》の設計を打診した⁽¹⁰⁾。そして、5月に開催された「島根県博物館建設促進委員会」で、建築設計を菊竹清訓に依頼することが正式に決議されたのだった⁽¹¹⁾。

設計を依頼された菊竹は、建設予定地を見るために、1957年6月に島根を訪れている⁽¹²⁾。おそらく、この時に田部が出雲大社に菊竹を案内したのであろう。出雲大社本殿を初めて実際に見た菊竹は、「あまりに感激が大きくて、一夜まんじりともしなかった」という⁽¹³⁾。

《島根県立博物館》の建築工事は1958年4月に着工し、12月に竣工している⁽¹⁴⁾。そして、田部長右衛門は翌年4月に島根県知事に就任した。その後、《博物館》の開館の準備が進められていた8月に、菊竹の論考「建築空間の伝承：島根県立博物館の設計にさいして」が雑誌『建築文化』に掲載された⁽¹⁵⁾。菊竹はここで、出雲大社本殿について初めて本格的に論じ、「出雲が、これほどの感動を与えるような、空間の迫力をもっていようとは思ってもいなかった。」と書き始めている。

菊竹は、出雲大社本殿が、「人間とのつながり」を残している「きわめておおらかな空間」であること、完結し固定した空間ではない「変化を許容する空間」であることを述べているのである。こうした空間を菊竹は「伝承空間」と名付け、建築空間は「伝承空間」として構想されねばならないと考えたのだった。

その後、菊竹は、1960年1月に『近代建築』に掲載された「島根県立博物館の設計にあたって うけつがれることとつらなること」⁽¹⁶⁾では、「建築空間のすべては、歴史のながれのなかで、いかにうけつがれてゆくのか、どううけつがればよいのかという課題にわれわれを当面させている。」と始めている。出雲大社に「伝承空間」を見た菊竹が、引き続いて建築がどう「うけつがれる」のかを問題と

し、考察を続けていたことがわかる。

「つらなること」については、菊竹は、都市と建築との「空間機能的つらなり」に加えて、「生活感情的なつながり」についても触れている。菊竹は、当時の松江の広告や看板の少ない様子を見て、こうしたものを必要としない「何かのつながり」を松江という都市が持っていると推測している。こうした「つらなること」は、出雲大社と「人間とのつながり」にも通じるものであっただろう。

以上、見てきたように、《島根県立博物館》建設の際に、菊竹は、いかに建築がうけつがれるかという問題と、人間とのつながりという問題を考えていた。それらは、山陰での二番目の建物である《出雲大社 庁の舎》でも追求され、その後、菊竹独自の方法論が生まれることになる。

2. 《出雲大社 庁の舎》と「か・かた・かたち」の方法論

《島根県立博物館》は1959年10月に開館し、田部長右衛門は翌年3月に、出雲大社の第二次(庁の舎)復興奉賛会会長となっている⁽¹⁷⁾。田部は《島根県立博物館》に続き、菊竹に《出雲大社 庁の舎》の設計を依頼したのだった⁽¹⁸⁾。構想を練り設計案をつくった菊竹は、1960年9月に来県し、神社側と打ち合わせた。そして、神社側の意見を受けて修正を行い、11月初めまでに設計案をまとめることになる⁽¹⁹⁾。

菊竹は、自身の代表的な著書『代謝建築論 か・かた・かたち』(彰国社、1969)において、「デザイン(設計)とは何か、という問題に遭遇し、考え始めたのは恥ずかしいことであるが、出雲大社庁の舎という独自の機能をもった建築の設計をすることになった」時で、この時「設計のための一つの仮説をそこに組み立て、この仮説にしたがって設計しようとした」と述べている。実際に《出雲大社 庁の舎》の実設計が終わった後、菊竹は1961年11月に「設計仮説」を発表している⁽²⁰⁾。菊竹は、ここで、設計を「か(秩序)」「かた(典型)」「かたち(形態)」の三つの段階として捉えたのだった⁽²¹⁾。

この「設計仮説」(1961)が掲載された『建築』第15号は、「菊竹清訓その作品と

方法」と題した記事が特集された号でもあり、これから着工が予定されていた《出雲大社 庁の舎》が紹介されている。菊竹によって、そこで重要な課題として語られているのは、「つくられる庁の舎が、いつまで耐えぬいて、そこに建つづけるか」ということであった。また「耐久力をとことんまで追求し機能を失ってもまだ何かのこっているような」というイメージが記されている。そして、菊竹にとってこの問題は、「徹底的につきつめないかぎりどうにも、先にすすめないような性質のものであったばかりか、建築家が、何をつくろうとするのかという基本的なことにまで、かかわってきそうな」ものであったのだった。

これは「設計仮説」(1961)において、「かた(典型)」を説明した第1章の中で、「空間は機能をすてる」と題して、建築を後から受け取る側に立って捉えられた問題でもあった。長い時間が人間とのつながりを拭い去り、機能と形態の結合関係が見失われた空間である「機能をすてた空間」に、人間が感動したり、刺激を受けたり、啓発されることがあるとするなら、それは、どういう場合かという問いである。菊竹は、自らの問いに、それは人間がその空間に新しい機能を発見する場合であると答えている。菊竹自身、出雲大社本殿に独自に考えた新しい機能を発見しており、その経験からこうした考えが導き出されたと思われる⁽²²⁾。

そして、もし長い時間を経て、当初、意図された機能と形態のつながりが見失われてしまった空間に、後の人間が新しい機能を発見できるような空間をつくれるなら、こうした空間はみんなのものとなり、うけつがれるだろうと結論づけたのだった。

一方で、「設計仮説」(1961)の「か」についての説明では、この設計作業における仮説を考えることになった背景が語られている。それは、チームでいかに協同して設計にあたるかという問題でもあったということである⁽²³⁾。当初、「か」は「構想」ではなく、「秩序」とされていた。そして《島根県立博物館》の竣工直後に発表された《塔状都市》(1958)、《海上都市》(1958)といった未来都市の提案は、この「か(秩序)」を求めてのものだったのではないかと、菊竹は思い返しているのである。菊竹は、事務所のメンバーが、それをベースに設計をすすめることができ

る「共通の足場」が必要であるとし、その際に重要となるのが「か(秩序)」であり「設計仮説」であると考えたのだった。未来都市の提案は、事務所での作業という側面からみると、設計の際の「共通の足場」を求める行為だったのだ。

「か・かた・かたち」の方法論がほぼ確立し、この方法論によって事務所全体で設計をすすめたのが京都の《国立国際会館設計競技案》(1963)だった(24)。1963年5月に《出雲大社 庁の舎》が竣工し、6月に《国立国際会館設計競技案》を提出、7月に「優秀案」という審査結果が出た後、9月には雑誌『建築』に「設計仮説 現代建築への設計の理論」が掲載されている(25)。菊竹のここでの「か」について説明には「秩序」に加えて「構想」という意味が付け加えられている。そして、「新しい機能の発見」を「か(構想・秩序)」の目標としたのであった。こうして、建築家は「新しい機能の発見」を目標とし設計を始め、つくられた空間に、また後の人間が「新しい機能の発見」し、建築はうけつがれてゆくことになる。

おわりに

《島根県立博物館》の設計に際して、菊竹は建築が「うけつがれること」を重要な問題と考えていた。それは、出雲大社との出会いによって強く意識されたものであった。この問題において、菊竹は建築と人間とのかかわりを重視している。「うけつがれること」についての考察を続けた菊竹は、《出雲大社 庁の舎》の設計の際に、「新しい機能の発見」を見だし、また独自の方法論の基礎を築いた。

菊竹が山陰を訪れるきっかけとなった《島根県立博物館》以降、鳥取県米子市に《ホテル東光園》(1964)、山口県萩市に《萩市民館》(1968)など山陰には菊竹の設計による建物がいくつも建設され、今も、その多くが残っている。こうした建築では、菊竹の考えたように、その建築にかかわる人間が、菊竹のつくった空間に、何かしら新たな機能を見いだすような「構想(か)」を働かせることによって、今も建築が「うけつがれ」ているのではないだろうか。

註

1. 現在は、《島根県庁第三分庁舎》となっている。
2. 田部長右衛門朋之 実業家、政治家。衆議院議員、島根県知事。田部家第23代当主。島根県雲南市吉田町の鉦製鉄業の旧家田部家の第22代長右衛門茂秋の二男に生まれ、松江中学、慶応義塾、新潟高校を経て京都帝大経済学部入学。1933年卒業とともに帰郷、日本有数の山林地主としての家業に携わり経営の近代化につとめた。『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社、1997年。
3. 菊竹清訓作品展「日本の環境づくりへの提言」、会期：1999年3月6日～3月28日、会場：島根県立美術館 県民ギャラリー。
4. 田部は、「昭和7、8年頃から構想を練っていましたが、昭和17年に代議士に当選したとき、さっそくこの構想を具体化したいと思って、当時まだ存命中だった旧藩主の松平直亮氏を訪ね「松江に美術館を建てたい。ついでに松平家に伝わっている名宝を永久に島根県に残し、県民と結びつけたい。そのための財団法人を作るから名宝を譲り渡してほしい」と懇請したのですがその時は聞き入れてもらえなかった。」と語っている。「こうして生まれた博物館」『島根新聞』1959年10月6日。
5. 田部によると、名称を「松江博物館」とした理由について、「大体私は美術館で発足したかったが、国庫補助の関係などから博物館としたわけです。」と述べている。「待望の松江博物館をさく」『山陰新報』1953年5月11日。
また《島根県立博物館》の開館後には、「もともと美術館を建てるという構想だったのが博物館になったのは、現行の博物館法の運営規程にしたがった方が、何かと便利が多いのです。国立博物館との関係やつながりもよく、伊達源一郎氏から買った鳥類の標本コレクションという自然科学系統の資料もありましてね。」と語っている。前掲註4。
6. 『島根県庁周辺整備誌』島根県、1972年、93頁。
7. 現在は、《久留米市美術館》となっている。
8. 前掲註4。
9. 「松江市議会です承 県立博物館の寄付」『山陰新報』1957年3月7日。
10. 岩佐新は、美術雑誌編集者、プリヂストン美術館主事。島根県安来市出身で、プリヂストンタイヤ創業者の石橋正二郎(1889-1976)の一大美術コレクションのコレクション整理の実務を担当した。『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社、1997年、および『特集展示 コレクター石橋正二郎 青木繁、坂本繁二郎から西洋美術へ』石橋財団プリヂストン美術館・石橋財団石橋美術館、2002年。
田部は、後に「郷土出身の石橋美術館主事岩佐新氏の紹介でさっそく同氏に設計を依頼することになったのです。」と語っている。前掲註4。
また1957年3月16日の日付のある菊竹への設計依頼の相談についての田部から岩佐に宛てた手紙が、情報建築に残されている。

11. 前掲註6,93-94頁
12. 「県立博物館設計の菊竹氏語る」『山陰新報』1957年6月28日。
13. 田部は「まず第一に松江の環境を見てもらいたいと菊竹氏をこちらへ招待し、まず出雲大社へ案内したら、大社の建築にひどく感激していましたね。あまりに感動が大きくて、一夜まんじりともしなかったといっておられましたよ。なるほど、いざこの博物館ができてみると、出雲大社の感じによく似てるんですよ。全体の量感そのものから、内部の手すり、階段天井にいたるまでそっくりです…。なるほどなと思いました。」と後に話している。前掲註4。
また菊竹自身、出雲大社本殿の空間的な迫力について、「空間というものを設定するときの、その空間をリアライズする最も重要な要因として、そこに木材とそれから木材の架構性というふうなことが、非常に生にここにはあると言うことなども感じられるのであります。」と分析している。菊竹清訓「出雲神殿の空間—構想の原点」『人間の建築』井上書院、1970年。
14. 前掲註6,100頁。
15. 菊竹清訓「建築空間の伝承：島根県立博物館の設計にさいして」『建築文化』第14巻8号、1959年8月
16. 菊竹清訓「島根県立博物館の設計にあたって うけつがれることとつらなること」『近代建築』第14巻1号、1960年1月。
17. 1953年、出雲大社では、鑽火殿より出火し、庁の舎、拝殿も焼失した。田部は第一次復興奉賛会副会長として、拝殿の再建に尽くし、募財運動の先頭に立ち、拝殿は1958年に完成した。『田部長右衛門(朋之)先生追悼録』同刊行委員会、1981年、205頁。
《庁の舎》については、「拝殿の再建には宇豆柱が100万円。脇柱1本30万円で総額7000万円を木材費に要したが、庁の舎再建の際は、用材がなく異論百出のすえ鉄筋づくりに踏み切ったようだ。」との記録もある。柳本見一『激動20年』毎日新聞西部本社、1965年
18. 当時の雑誌には、「千里の馬を見つけた伯樂のような気持ですわい」島根県知事の田部長右衛門氏は、菊竹清訓さんを名馬にたとえて、満足そうな顔をする。」「昭和32年に、まだ無名といってもよい菊竹さんを島根県立博物館の設計者に起用して成功。つづいて依頼した出雲大社の庁の舎(社務所)」、「その菊竹さんが汎太平洋建築賞と芸術選奨文部大臣賞を受け、昨年度にもっともすぐれた仕事を残した建築家と折紙をつけられたのだから、田部知事の鼻も高いわけである。」「庁の舎も木造で復興しようという声が強かったが、これだけは鉄筋にして、二度と火を出すまいというのが私の主張でした。私には菊竹さんならやれるという信念があった。」というような記事が掲載されている。「表紙の人 菊竹清訓」『週刊朝日』第69巻16号、1964年4月10日、24頁。
菊竹は、《出雲大社 庁の舎》の設計にかなり時間がかかったことを何度も語っており、田部が第二次復興奉賛会の会長となる前に、菊竹に設計の打診があった可能性も考えられる。
19. 菊竹の9月の来県の様子は、「県内事情 出雲大社庁の舎の再建」『島根タイムス』第35巻7号、1960年10月、54頁を参照。
すでに8月には菊竹清訓建築設計事務所によって『出雲大社 庁の舎計画案』がつくられているが、9月の案はそれから大きく変更されているようである。これには菊竹が次のように語る事情があったのかもしれない。「これでいよいよ最後のプレゼンテーションだ」ということになって、出雲で関係の方々にお集まりいただいて、私も東京から模型を持って行ったんです。ところが、翌朝まで考えて、「やっぱりやめよう」と決心して、皆さまにお詫びを言って帰ってきちゃったことがあるんですよ(笑)。」。菊竹清訓、内藤廣「著書の解題5 対談 時代を画した書籍5『代謝建築論』」『INAX REPORT』第171号、2007年7月、27頁。
20. 菊竹清訓「設計仮説」『建築』第15号、1961年11月。
21. 菊竹は、こうした方法論について、「原子物理学者の武谷三男先生、評論家の川添登氏の方法論に直接の影響を受け、「か」「かた」「かたち」の三段階の方法論を考えたわけです。その当時、1960年に東京国際デザイン会議が開催され、世界の著名な建築家が東京に集まり、数多くの理論と作品に触れました。なかでもアメリカの建築家ルイス・カーンの方法論と私の考えていることが、ほとんど同じ内容のものであったことを知り、驚くと同時にその自信を深め」と1998年3月に当館で開催された展覧会の「ごあいさつ」で述べている。前掲註3。
22. 菊竹は、《庁の舎》の基本設計が終わった後、出雲大社本殿を「住居としてより庫として考えたい」と述べ、独自の復元案を描いている。菊竹清訓「古典に投げかける現代の目—建築家は古典をどうけとめるか」『近代建築』第15巻1号、1961年1月。
23. こうした問題を、菊竹は早い時期から意識しており、1957年には「建築設計に当る設計態勢の問題も自分の道を切り開くために乗り越えなければならない」と述べている。『建築と社会』第38巻1号、1957年1月。
その後、所員が増えるにつれこの「共通の足場」の問題が切実になったということも、「設計仮説」(1961)が生まれたきっかけのひとつであろう。
24. 遠藤勝勲「ある回想 国立京都国際会議場競技設計応募案」『菊竹学校』NPO法人建築文化継承機構 2015年。
25. 菊竹清訓「設計仮説 現代建築への設計の理論」『建築』第36号、1963年9月。

うけつがれてきた菊竹建築

島根県東部県民センター出雲事務所 建築課長

山本大輔

はじまりの「島根県庁周辺整備計画」

初期の菊竹建築3作品を含む島根県庁周辺の建築群は、当時の県知事 田部長右衛門(1906-1979)が主導した「島根県庁周辺整備計画」に基づいて整備された。

主要な建物の設計者には、島根県邑智郡日貫村(現邑南町)生まれで建設省技官出身の建築家 安田^{かたし}臣(1911-1977)と、気鋭の若手建築家 菊竹清訓(1928-2011)が起用された。

菊竹は、《旧県立博物館(県庁第3分庁舎)》(1958)、《県立図書館》(1968)、《県立武道館》(1970)の設計を通じて田部と生涯にわたる信頼関係を築き、県有施設のほかにも《出雲大社庁の舎》(1963)や《田部美術館》(1979)など、山陰に数多くの建物を設計した。

菊竹建築の維持保全

1970年に「島根県庁周辺整備計画」が完了した後も、《県立図書館新館》(1983)や、《県立博物館収蔵庫》(1986)など、蔵書、収蔵品の増加等に伴う増築が行われているが、設計を手掛けたのは菊竹事務所ではなく、複数の地元設計事務所で設立された協同組合建築技術センターであった。この頃にはすでに地域の設計事務所も一定の技術力を身に付けつつあり、「都会の建築家を招聘する時代」から、「地域の建築は地域の設計者が手掛ける時代」へと移行していたことが読み取れる。なお、田部知事は3期12年を務め、整備完了の翌1971年に退任している。

また、「整備計画」による建物はいずれも旧耐震基準による設計のため、耐震改修を必要とした。菊竹が設計を手掛けた《旧博物館》、《図書館》、《武道館》も2011～2013年度に耐震改修が実施され、当時営繕課に在籍していた筆者が担当した。

耐震改修の設計は、意匠や構造等の特殊性から原設計者である菊竹清訓建築設計事務所に委託することとなり、そのうち耐震診断と構造補強設計は

O.R.S.事務所が担当した。O.R.S事務所は、数多くの菊竹建築の構造設計を手掛けた早稲田大学名誉教授の松井源吾(1920-1996)が設立した構造設計事務所である。

耐震改修の設計に先立って、筆者は菊竹建築が島根県庁の周辺に数多く建てられた経緯や建築的な特徴、価値等について調査し、2011年7月には菊竹氏にも建設当時の状況について話を伺った。(同年12月、耐震改修の竣工を見ることなく菊竹氏が逝去されたことは誠に残念であった。)そして、可能な限り文化財建造物を扱う場合と同じ考え方で耐震改修設計・工事をを行い、それぞれの建物が持つ「文化的価値」と、現代に求められる「機能性」や「耐震性」との両立を図っている。

また、《図書館》では付属の駐輪場(設計は県教育委員会)の老朽化が著しく、耐震改修に合わせて、筆者の設計で建て替えを行った。《図書館》と《武道館》に共通のデザインである45度の壁柱を踏襲し、耐震改修を通じて菊竹建築に学んだスケール感とディテールの考え方を詰め込んでいる。ごく小規模な建物だが、設計を外注せず役所の技師が自ら手を動かしたことも含めて想定外の高い評価を受け、2015年に内藤廣氏が審査委員長を務める「JIA中国建築大賞」で特別賞を受賞した。

再評価の気運の高まり

こうして保全された菊竹建築の文化的価値は、近年、国や建築関連団体による再評価の機運が高まっている。2019年には《旧博物館》が、安田氏の設計した《島根県庁舎》とともに国の有形文化財に登録された。その他の建物についても登録に向けて国と協議が進められている。(※)

同年12月、文化財登録を記念して《旧博物館》でささやかな展覧会を行うことになり、菊竹夫人のスミス睦子氏のご協力を得て60年前の貴重な建築模型を展示した。このとき、借用の手続きを通じて菊竹建築資料の継承と管理、調査研究などの現況を図らずも把握することになった筆者は、以前から菊竹建築の展覧

会を開催したいと考えていた島根県立美術館の依頼を受けて、資料継承者のスミス氏はじめご親族や、資料調査を実施している国立近現代建築資料館及び早稲田大学古谷研究室とのパイプ役を務めた。このことが今回の企画展「菊竹清訓 山陰と建築」の実現へとつながった。

菊竹建築はなぜうけつがれているのか

近年、戦後の有名建築が“老朽化”を理由に建て替えられることが多く、県外の建築ファンから「なぜ島根県には古い菊竹建築がこれほど良い状態で残っているのか」と質問されることがある。これは文化的価値への理解のみならず財政上の理由等、さまざまな要因によるもので、一概に説明することは難しい。

ただ、筆者が県の建築技師として強調しておきたいのは、歴代の先輩職員が今日まで実に上手く建物を維持保全してきたということである。有名建築家が設計した建物は、その価値が理解されなかったり、逆に遠慮しすぎたりして適切な改修が行われないことがある。その点、先輩職員たちは設計者の意図に敬意を払い、しかし表面的なデザインには惑わされず、技術的に必要な改修を臆することなく行ってきた。多少、オリジナルのデザインが失われた部分もあるが、総体としては国内外の専門家が驚くほど良い状態で現代を生きている。

筆者が先輩職員から昔話を聞くたびに感じるのは、菊竹氏の駆け出しの頃から晩年までを見届け、所有者の立場で菊竹建築を維持保全してきた技術者としての「自負」と「主体性」である。彼らの菊竹建築にまつわる苦労話は付きるところがないが、そこには人間が建物の「価値」に引きずり回される弱々しさは少しも感じられなかった。

建築が「うけつがれること」を考えると、ここに大切な示唆が含まれているように思われるのである。



県庁周辺の航空写真(1970頃)



《島根県立図書館駐輪場》(島根県総務部営繕課、2015)

※本展会期中の3月19日、国の文化審議会が《県立図書館》《県立武道館》《旧博物館新館》を文化財に登録するよう文部科学大臣に答申した。

オーラルヒストリー

遠藤勝勸編

話し手: 遠藤勝勸 (建築家、遠藤勝勸建築設計室)

聞き手: 斎藤信吾 (建築家、あかるい建築計画)

2020年12月22日

—山陰で菊竹氏の設計が始まったきっかけを教えてください—

久留米市の石橋文化センターという公園の中に《石橋美術館(現・久留米市美術館)》(1956)という建物があります。基本設計をブリヂストン創立者の石橋正二郎さんがされたのですが、予算がない中で、菊竹さんがその基本設計をもとに色々工夫をされました。展示室や収蔵庫などの大切なところは空調を導入したのですが、その他はすべて自然採光、自然通風という形で設計をされました。美術館を見た田部さんは、自然採光、自然通風でこういう近代美術館ができていることにびっくりされました。「こんな素晴らしい建築家はいない。」と。

島根の仕事が始まったのは、菊竹さんがまだ《ホテル東光園》(1964)を作る前でした。菊竹さんの知り合いで、流政之さんという彫刻家がいて、東光園の造園をしていました。流さんは菊竹さんが島根で仕事することを知りまして、菊竹さんに「松江でなく米子に泊まって、米子から松江にタクシーで向かう途中で色々なものを観察したり、土地の人の話を聞いたりしたほうが、田部さんときちんとした話ができるのではないか。」というアドバイスをされました。菊竹さんは素直にそれを実行し、成功したのです。

菊竹さんは、たばこもお酒も飲みませんし、建築に関してはすごく真面目な人ですので、その仕事ぶりに田部さんは惚れ込みました。「この人であれば、建ててもらいたいものがある。」と考えて、出雲大社に連れて行かれました。庁の舎が火事で燃えた後でしたので、菊竹さんに「庁の舎を設計してください。ただし条件があります。火事で燃えたから燃えない建物を作って下さいね。」と言ったのが、《出雲大社 庁の舎》(1963)の設計の始まりだったのです。

—松井源吾氏(構造家)と共同し、どのように技術へ挑戦をしていたのですか?—

松井先生は構造が好きなのです。だから珍しい梁の提案を菊竹さんがすると、すぐ計算して、鉄筋から何かに入れてしまうのです。そういうところがやはり素晴らしいと思う。例えば《東光園》の12mごとに建てる柱ですが、最初は6本で、1本の柱が2m角だったのです。しかし、2m角じゃとてもどうしようもないので、なんとかしたいと話しているうちに貫という考えが出てきました。柱を少しずらして分散すれば、中心の柱が90cm角で周りの柱が50cm角というふうに、どんどん小さくなる。

その前の京都の《国立国際会館設計競技案》(1963)の時にいろいろ構造を考えたので、その時蓄えたものがいっぱいあるのです。コンペに落ちたその後すぐ、新しい現場や設計が始まりました。所員ひとりひとりが担当することになりますが、その人たちが京都国際会議場でいっぱい提案したものを、新しい建築を設計する時に全部出していったのです。ですから、《国立国際会館設計競技案》が、万が一、1等になっていたら、《東光園》も生まれなかったし、《佐渡グランドホテル》(1967)も生まれなかったし、《都城市民会館》(1966)も生まれなかったのです。《国立国際会館設計競技案》を紐解くともっともっと色々なものが出てくると思います。そんな考えで僕は後の設計をしていました。

長谷川逸子編

話し手:長谷川逸子(建築家、長谷川逸子・建築計画工房)

聞き手:斎藤信吾(建築家、あかるい建築計画)

2020年12月22日

—入所当時の菊竹事務所の様子を教えてください—

私の頃は、理工学部とかそういう所に女性は行ってはいけないという時代でした。全然違う目的で横浜の(関

東学院)大学に行き、1、2年学校に通っていませんでした。2年の終わりごろに建築学科に進む人に課題が出て、小住宅を設計することになりました。全くわからなかったのですが、ヨットハーバーで船の設計をしていたので、そこにあったバルサで模型を作って、友達に持って行ってもらったところ、担当教授が早稲田大学であった学生会議の模型展に出してしまったのです。そうしたら、菊竹さんが模型を見られて、「国際会議場というコンペ(国立国際会館設計競技)があって、バルサで模型を作りたいので手伝ってほしい。」と直接、電話をしてきたのです。設計事務所なんて行ったことがないので、びっくりしましたが、言われるがまま行って手伝いました。お礼は《スカイハウス》(1958)を見せて頂いたという非常に幸運なことでした。前から見たかったので。

そしてスタッフが少ないのでしょうか、3年生になると、設計などしたことがないのに、「浅川のアパート(浅川テラスハウス)の設計を手伝ってくれ。」と言われました。割と菊竹さんは強硬でした。それで設計をしてしまいました。ここ(国立近現代建築資料館)の展覧会に来た時に、私の図面が展示されていて、びっくりしました。当時、菊竹さんが言う、「ボイドスラブ」や「フラットスラブ」などの言葉を初めて聞くくらいの学生でしたから、びっくりしながら1カ月間設計をしました。その時、ちょうど3年生なので、将来どうするかと考えた時、設計事務所は案外面白いと思いました。遠藤さんみたいな方がいらっしゃいますし。だけど、勉強していないので、芸大の大学院に行く手続きをしてしまいまして、そこへ行くつもりでいました。

だけど、菊竹さんから4月間際になって、「うちの事務所に来るのですよね。」って電話が来たのです。月謝は損するけれど、入れてくれるならと思いききました。だから、建築は菊竹さんの所に入ってから勉強をしました。本当に学生みたいなのが入ったことになります。ところが、最初の仕事で菊竹さんに、「《ホテル東光園》(1964)の天皇陛下が泊る部屋の家具、インテリアを設計してください。」と言われて正直、衝撃的でした。「考えます。」と言ったら、近くで聞いていた伊東豊雄が、「贅沢なことを言う。」と怒っておりました。そこが始まりです。

—在籍当時、菊竹氏とはスケッチを介して、どのようなやり取りがありましたか?—

《都城市民会館》(1966)については、最初、菊竹さんの後ろの大きなテーブルに座らされて、私に話をして、「地盤が悪いから構造は一点集中。設備も一点集中。」といった情報をくれて、「2、3日でスケッチをしてください。」と言われました。それで描いていくと、そのスケッチを持って行ってしまうのです。どうも家で見ているらしくて、自分のかたちで見直しているのだと思います。

一番困ったのは《萩市民館》(1968)の時です。《パシフィックホテル茅ヶ崎》(1966)の家具などを設計するた

めに見に行くときは、菊竹さんの車に乗って行きました。女性は現場まで行ったらいけないということですからごく過保護でしたので、菊竹さんが連れて行ってくださるのです。それで、その度に何か聞くのです。私が割と素人っぽくて、変なことを言いそうな人だからでしょう。「今のあの萩の市民館、どう思う。」と聞かれたので、「いやもうすごい、コンクリートでできましたね。」くらいに言っていたのですが、帰りに、「将来君が建築家になったら、どんな建築を作る。」って聞かれたのです。私は、近くに造船所があって船の鉄板の加工をしているのを見ていたので、「鉄板みたいなもので建築を作るんだ。」と話をしました。そしたら、事務所に着くなりスケッチが来て、「君、明日の朝までにこのスケッチを100分の1くらいで描いてくれないか。」って言うのです。「そんなの10時間くらいで描けますか。」と言ったら、「描ける範囲でいい。明日、遠藤さんが帰ってくるから渡さないといけない。」と言うのです。遠藤さん怒るだろうなと思いました。実際、怒りましたけど。もう見積もりも取って、現場に入ったばかりの《萩市民館》を、鉄板で作ることに変えてしまうのです。

内藤廣編

話し手:内藤廣(建築家、東京大学名誉教授)

聞き手:斎藤信吾(建築家、あかるい建築計画)

2020年12月22日

—菊竹事務所への入所当時の様子を教えてください—

もともと僕が菊竹事務所に行ったのは、スペインからシルクロードを通して帰ってきて、1年くらい仕事をしないでぶらぶらしていた時でした。吉阪隆正先生から電話がかかってきて、「お前なにしているんだ、出て来い。」と言うので、先生に会いに行き、色々話をしていたら、どこかでちゃんと勤めたほうが良いと言われました。それで、「自分に向いていないと思う事務所はどこだね。」と聞かれて、「多分、菊竹さんところは向いていないと思います。」と言ったのです。そうしたら、横にある電話機をいきなり取り上げて、「なんか変な奴がいるんだけど、面倒

を見てやってくれないか。」って本人の承諾なしに菊竹さんに電話しました。菊竹さんは、「明日から来て下さい。」と。ちょっと時間をもらいましたが、そうして僕は菊竹事務所に入ったのです。自分に本当に適性があるかどうか、よくわかりませんでした。遠藤さんにはものすごい迷惑をかけていたと思います。あんまり正しい所員ではなかった。不良所員だったと思います。

—菊竹建築の地域性は、どのようなところにあると思いますか?—

僕が菊竹事務所にいた頃は、《出雲大社 庁の舎》(1963)の向かいの《神祇殿》(1981)という建築を、栗原さんという方が担当していました。《庁の舎》と全然違うフォームですよ。その時は設備のこととか、環境のこととかに、かなり強く意識がいていました。いくつか説明の仕方があるかもしれないですが、《庁の舎》について菊竹さんからの説明は、「プレキャストを使って、日本中どこであれ最高の品質のものを作らなくてはいけないのだ。」ということでした。「最高の品質のものを作る」という言葉が強く印象に残っています。《神祇殿》のほうは、どちらかというとその場所の環境をどう考えるかということが中心で、《庁の舎》での考え方とはずいぶん違いがあると思うのです。《庁の舎》は「稲掛け」だとか、色々な説明の仕方がありますが、そういう直接的な隠喩で考えていた。僕がいた頃はどちらかというともうそういう側面は影を潜めていて、その場所の環境をどう建築化するかみたいなことに関心がいていました。《田部美術館》(1979)もそういうところがあったようです。前半と後半の違いというのはそういう違いがあるのかなという気がします。

—地域によって形の異なる作品性は、どのように生まれたと思いますか?—

非常に感覚的なセンサーの鋭い人で、おそらく僕らよりも数倍、数十倍そのセンサーが強い。菊竹さんは「プレアナリシス」という名前と呼んでいましたが、何か美しいと思うこととか、直感的にとらえたものをどうやって形に降ろしてくるか、その中に合理性だとか真実があると思っていたと思います。それを非常に上手くやったのが60年代で、それだけでは捉えられない環境だとか設備的なことだとかに入っていたのが70年代というように僕は思っているのです。そこでやはり迷いが生じてきましたし、ある種のわかりにくさも出てきたのではないかと思います。



オーラルヒストリー収録のようす 左から斎藤信吾、遠藤勝勲、長谷川逸子、内藤廣

オンラインパネルディスカッションII

「巨大は細部が宿すか? 菊竹清訓の建築を、架構と加工の点から考える」(一部要約)



パネルディスカッションのようす
上段左から本橋仁、河野克彦、秋吉浩気 下段左から森田一弥、山本大輔、福島加津也

パネリスト:

福島加津也(建築家、東京都市大学教授)

森田一弥(建築家・左官職人、京都府立大学准教授)

秋吉浩気(建築家、VUILD CEO)

コーディネーター:

本橋仁(建築史家、京都国立近代美術館特定研究員)

主催者:

山本大輔(鳥根県東部県民センター出雲事務所建築課長)

河野克彦(鳥根県立美術館専門学芸員)

要約:

上野小麻里(鳥根県立美術館専門学芸員)

収録日:

2021年2月21日

はじめに

本橋: 菊竹建築が持つ魅力の一つは、壮大な構想力のもとに生み出された形態だろうと思います。菊竹作品のキーワードの一つに、こうした大空間を作るための「架構」を挙げることができます。いわゆる巨大建築みたいな点が注目されがちですが、それは一方で高度経済成長のもつ勢いがゆえに成し得た建築だと、そんな懐古的な見方にもなりがちだとも感じます。「架構」が彼の魅力ではありますが、大きさを支える背景である、高い技術にも注目したいと考えました。そこで、もう一つのキーワードとして出しているのが「加工」です。大きい空間を作るのが「架構」であるとすると、これはものを成立させるためのディテールみたいなことです。マクロな「架構」の構想力と新しい技術の模索である「加工」こそ、菊竹清訓が他の同時代の作家と一線を画した部分だろうと思います。巨大な構想力みたいなことだけで菊竹像を語り続けるだけでは、菊竹建築を今にどう生かせるのか、どう継承していくのかということの議論に至らないんじゃないかと思っておりまして。そこで今回のディスカッションは、技術に高い関心をもっていらっしゃる登壇者の方々をお呼びしたわけです。一緒に、菊竹建築について語ってみたいと思います。

ディスカッションの前に各登場壇者より自己紹介を兼ねた25分間ずつのレクチャーを実施

ディスカッション開始

本橋: 菊竹の「か」「かた」「かたち」という三段階の論法が、「か」に戻る円環になっているのは面白いですね。予定調和的に終わってしまうところを、一旦崩すっていうプロセスが大事なところかなと思っているんです。

レクチャーのなかで、建築の設計に隠された非合理性のようなことがキーワード

にも出てきました。合理性を切り崩していく方法論について、それぞれのお考えをお聞かせいただけますか。

秋吉: 菊竹さんは『人間の建築』において、合理性ガチガチで建築を作っていくと人間のための建築ではなくなってしまうんじゃないかと指摘しています。また、『日本型建築の歴史と未来像』では、欧米型の高気密・高断熱住宅への批判をしていて、自然から閉ざされた建築をつくると「刑務所化」「動物化」「サーカス化」「非人間化」してしまうと書いています。つまり、非合理が人間の本質だということをおっしゃっているんじゃないかと思います。

僕の場合、建築物ができるまでの生産・流通というか、作り上げる技術や手段とか、それを手に入れる方法とか、そういうところまで設計の射程にいられている。建築の学生を育てるだけが教育ではなく、一般の人にもそれは必要だと思っているので、エンパワメントできるようなサポートのデザインを、僕はメタデザインとかメタアーキテクトって呼んでいるんですが、ハードよりむしろ、生活を作るための支援、プロとしての支援が必要だろうと思っています。

福島: 僕は、非合理も合理的なものも一緒に抱えながら、建築を作ることができると思っています。多分、菊竹さんもそう思っていたのではないのでしょうか。

本橋: ただ一方で不思議なのですが、そうした不合理さは合理的な思考を常としがちな建築家がそもそも設計できるものなのですか？

福島: 悪魔的な建築家にはできると思います(笑)。例えば、ミース・ファン・デル・ローエは同じタイプだと思います。彼のグリッドフレームは構造としてかなり不合理なものです。しかし、ミースはそれを一般の人や他の建築家が合理だと思うということを(意識して)、意図的にやっていたのではないのでしょうか。

本橋: なるほど、それは建築教育で教えてくれませんか(笑)。

森田: 技術は目的が定まってはじめて合理か非合理かが判断可能になります。たとえば日本の左官技術って、日本の職人さんに言わせると世界一だって言うけど、実は曲線とか曲面を塗るには向いてないんです。だけどヨーロッパに行くと、曲面を塗るために全く違う技術の左官体系があったりする。僕が古い技術に興味があるのは、ある原始性を持ったままの技術の方が、特定の目的に最適化された技術より、環境が変わったときに急に価値が失われないというか、冗長性を持っているからなんです。古い建築のタイポロジーや技術を現代の建築に導入する場合、「伝統」というある意味では言い訳をしながら使うわけですけども、そういう理由はありつつも、やっぱり古い技術とか形式が持っている曖昧さみたいなものが、実はその「悪魔的な」技法を使わなくても、建築の中に不合理なものを残すことができる一つの方法なんじゃないかなって思っていますね。古さってというのはセンチメンタリズムだけじゃなくて、ある冗長性を担保するためにいい口実になる。

本橋: 冗長さといっても、それは技術として劣っていることを意味している訳じゃなくてことですよ。

森田: モロッコで左官職人さんが左官仕事をしているところに交ぜてもらったことがあるんですけど、仕上げに鉄の鋏を使わないんですよ。現地の川で探してきたという角が丸くなった石を使って表面をピカピカにしている。それでどんな曲面でも対応できるんですよ。それを見た時に、古い技術ってスピードは遅いけど、どんなものでも対応できるんだなって。これは多分いろんな分野のことにいえるんじゃないかなと思うんですけど。

秋吉: 建築家の松川昌平さんが、「か」「かた」「かたち」論を継承して「かち」っていう座標を作られています。今の世の中の価値軸は多様なのに、建築の世界は

構造合理性などの1つの合理性の指標が優先され過ぎているんじゃないでしょうか。構造合理性においては非合理だけど別の価値では合理的かもしれない、そういうことをきちんと精査して、部分最適ではなく全体最適を考えなければいけないんだらうなっていうのを今のお話を聞いていて思いました。

森田：そうですね。価値っていうものは移ろいやすいものだと思うんですよね。10年後にはそれがどうなっているかわからない。

本橋：更新という点からも冗長さは大事ですよ。建築家がある一時に設計した、何かに対し高度化された技術が、更新にすぐ弱みみたいなことは多々見受けれます。メタボリズムが全然メタボしてないじゃないか、みたいなことと同じかなと思います。皆さんは建築の完全性みたいなものについてどのようにお考えになりますか。

森田：僕の場合、京都で設計をしていることもあって、仕事の半分ぐらいはリノベーションなんですよ。100年ぐらい前の人が建てた建物を今僕らが改修して、もう100年後に誰かが改修するだらうなって感じで、今における完全性よりも、過去から未来への継続性を意識していますね。文化財を修復する時もそういう意識でしたし、新しいものを設計する時でも、今までいろんな人が受け継いできた古い技術を使いつつ、現代のコンテキストに合わせて更新しつつ、未来に向けて投げ返しているっていうイメージです。

福島：僕は、僕の建築を自分のクレジットがついた作品と考えています。一方で、これまでいくつか住宅を作ってきましたが、施主が住み始めてしまうとどう住まわれても気にならない。むしろ、僕が思いもしなかった住まい方をしている方が興味深かったりするのです。森田さんのお話から、数年前に見たドイツ空軍の格納庫を思い出しました。1930年代に作られた43mという大スパンの木造建築です。

ミュンヘン工科大学の先生が設計したのですが、完成してすぐに屋根が下がってきてしまったそうです。建築家が呼び出されて怒られるかと思ったら、施主であるドイツ空軍は屋根が下がったのは世界最大級のスパンなので仕方がない、その代わりどうやって補修したかその内容と順番が分かるようにして欲しい、と言ったそうです。素晴らしい施主ですね(笑)。結局、この補修には10年ぐらいかかったらしいのですが、今見ても技術の進化の途中がわかるようで、その変遷が非常に面白い。これまでで一番感動したと言ってもいい建築です。ただ、これには施主側や使い手側にもある種の包容力が求められます。建築家と一緒に新しい技術にチャレンジするという覚悟があったからこそ、そういう空間が生まれたのでしょう。本橋さんのご質問に対してお答えすると、建築家だけではなくて社会の状況のようなものも、空間の質に大きく関わってくると思います。

秋吉：僕は建築家像の理想型を二つもっています。一つは「弱い建築家像」。《まれびとの家》は(組織でやったにもかかわらずなぜか僕の名前だけがクレジットされてしまうんですが)、この形状でいいだらうって機械で削って持って行って、組み立てを手伝ってくれる大工さんや地元のボスに見せると、「こっちの方がいいかも」って、双方向的な共創を行っています。どんどんその場で改善されて、アイデアに乗っかりあって、デベロップしていく。そんな風に設計を進めていっているんで、そこに強い原作者性っていうのはなくて、もしかしたらそれは民家成立の時間の一断面を素早くやっているのかもしれない。だから僕個人が作ったものじゃなくて、その地域にいる人たちの意見が組み込まれていて、共有資源になっている。そんな「しなやかな」プロセスに興味があって、そういう進め方をしています。もう一つは「やわらかい建築家像」。建築史家のマリオ・カルボは、デジタル技術によって、もう一度中世の手づくりの時代の匿名性とか可変性を手に入れるのではないかと言っています。さらには、建築家はアルゴリズムを作る人か、インデックスを作る人かに分かれるだらうとも言っています。またデジタル技術を使った建築家というのは、原作者としてクレジットする対象が全く変わってくるって

うことを言っていて、僕らもフォーマットというかアルゴリズムみたいなものを作ることに注力していて、オープンデータも共有していたりするんですけど、重要な勘所のものの構成のルールなどのフォーマットを担保してあげれば、あとはそれに乗ってみんなが勝手にインデックスを産み出してくれる。専門家が考えなきゃいけないのはそういう難しいところだったりするなと思っていて、原作者性っていうか、そのあと誰がどうしても、建物自体が改変されようが、建物のデータが改変されるっていうことにも全然違和感ないですし、むしろうまく利用していったって欲しいと思っていて。菊竹さんでいう「かた」みたいなものが社会的共通資本として、みんなに等しくシェアされることによって、それにアクセスして、みんながそれを変えて改善していくっていうことは、もしかしたら民家の本質だったのかもしれないし、そういうことをやっていきたいなっていうふうには思っています。

山本：島根県は、菊竹さんが強い作家性で作られた建物を、60年間維持してきた歴史の中で、必要なところは思い切って改変しているんです。一方で、設計者の意図に対する配慮みたいなものは、我々の先輩はちゃんと敬意を払ってやっているところがあって、総体として見るとすごくいい状態で残っています。菊竹さんに頼らないメタボリズムというか、地域の人達が受け継いでいくメタボリズムっていうのが、現実として行われていると思いますね。増築したり改変したりしないといけない立場からすると、強い作家性を持って作ってくれていた方が、難しいところももちろんたくさんあるんですけど、やりがいがあるというか、何とかしてやるぞっていう気持ちになりますね。力のある空間だと、あとの人がそれを見て、インスパイアされてしまうという実感があります。

福島：60年という長い間、島根県庁が施主としてまた使用者として、菊竹さんという強烈な個性を持った建築家と併走してきたというのはとても考えさせられます。一方で、先ほど秋吉さんや森田さんがおっしゃっていたのは、日本の建築界の中に、作家性や天才性を強調しすぎるような、僕も悪魔的と言ってしまいました

けど(笑)、そういうようなところがあったような気がしています。飛行機の話を見せてもらおうと、日本の戦闘機は一人の作家が設計したように言われています。しかし、アメリカやドイツはチームで設計しています。チームで設計しているということは、その技術が先端的なものであったとしても、他者に伝達しなければなりません。このチームでやるための伝達可能性は、秋吉さんが言っていた技術のフリーソフト化や社会の共有財産という考え方につながっていくように思います。それに対して、一人の作家に頼る方法は、作家がスランプになると何もできなくなってしまう。日本の建築界やものづくりは、作家性を強調しすぎた面がある。それに対して、最近の若い人達が少し違う方法を求め始めているのかなと感じています。もちろん、どちらがいい悪いという話でもないのでしょうか。

森田：あと、地域性っていう話も、そろそろする時かなとかいう気がするんですけど、地域性ってすごく取っつきやすい言葉なんですけれども、例えば菊竹さんが島根で仕事をしたのっていろんな人の縁があったとは言え、ただの偶然ですよ。その偶然をきっかけに菊竹さんがこの地を訪れて、菊竹建築が生まれた。だから建築は基本的に一回性の、偶然の産物なんだけど、歴史って地域性の中で生まれてくるものというよりは、そういう偶然の繋がりの中で生まれてくるものであって、それをどう受け継ぐかっていうことの方が、地域性をレイヤーのように積み重ねていくためには大事なんじゃないかなっていう気がするんですよ。

本橋：つまり、同時に菊竹さんみたいな人が一回性だとしても仕事をしたからこそ、それによって地域性が客観化されるみたいなこともあるわけですよ。

森田：そうですね、基本は偶然なんだけど、それが客観化されて地域性になるんじゃないでしょうか。だからその偶然を大切にするというか、消してはいけないってことなんじゃないかなと思います。ある世代が生み出したものをそんなに簡単に壊しちゃいけないという気分なんですよ。

あとは、やっぱり「オリジナル」とか「天才性」みたいなものを1回忘れたほうがいいですね。京都の町家もそうなんです、その建築が、どう使えるのかっていうふうにドライに考えた方が、建築は残りやすいと思います。

山本：うちの先輩職員は、菊竹さんの建築界での評価なんてさほど意に介してないところがあって、「作品」ではなく「建物」としてドライに守ってくれたのがかえって良かったという面もあるかもしれないですね。こんなこと言っているのか分からないですけど(笑)。

本橋：建築が無名・匿名になったときに、むしろ建築が残りやすい、強いというのは、従来の建築保存の価値観とは反転していて興味深い指摘です。建築の愛され方ということの問題を考えた時、公共建築が難しいなって思ってしまうのは、所有者が曖昧で個人に特定されないところがありますよね。

山本：役所って個人の顔が見えにくいですし、あえて見せないようにしている部分もあります。そういう中で自分は意識的に個人名を出して建築をPRしていて、それはやはり顔が見えることで伝わるものがあるんじゃないかと思ってやっているんですけど、一方で危なっかしさというか、個人でやっていることが組織としての言動として受け取られてしまう部分もあって、これが本当にいちばんいい形なのかっていうのは、悩みつつやっています。

秋吉：さっきの福島さんの話と全く逆の話だから面白いなって思いました。作る側は組織じゃないと伝承しないのに、利用する側は個人じゃないと伝承されないんじゃないか、みたいな。

本橋：今回は、私が技術の話のテーマを出して、山本さんから継承の話もぜひして欲しいということで、技術から継承の話が本当に繋がるのか不安なところでは

ありましたが、シームレスにディスカッションが繋がりました。きょう話になったことは、島根の菊竹建築に限らず建築の継承において重要な指摘だったと思います。どうもありがとうございました。

YouTubeにて3月7日公開

株式会社 みずほ設計 江角彰宣

(菊竹清訓建築設計事務所在籍期間／1973～86年)

《出雲大社 庁の舎》を見て感動し進路を建築に決めて、学生時代から菊竹事務所に通った。同期で11名採用され、所員数は50名。多くの仕事をしたが、《出雲大社 神祇殿》、《田部美術館》、《軽井沢高輪美術館(現・セゾン現代美術館)》などが最も記憶に残っている。入所4年目に初めて設計から現場監理まで行った《京都信用金庫 東亀岡支店》は大きな経験となった。ひとつの仕事に3、4年間携わりながら、チーフになると年間5～10のプロジェクトを受け持ち、スタッフ5名程度を抱えて取り仕切り、出張で飛び回った。菊竹事務所は、全ての責任を持たせるのがすごいところ。非常に厳しかったが、すごく育ててもらった。こんな事務所はほかにないだろうと思う。35歳で退所し、東京で事務所を設立、44歳の時出雲に戻った。「建築に対する概念をきちんと持ちなさい」というのが菊竹さんからのメッセージ。まだその「概念」をつかみ取るためにもがいているところだが、勉強しながらものづくりをしていきたいと考えている。「都市計画」から「道具」まで設計を教えていただいた。それを山陰に戻ってからやり続けている。《島根県立図書館》、《島根県立武道館》、《島根県立美術館》の改修も行っており、今後も菊竹作品に関わる仕事が続くだろうと感じている。

(2021年3月3日談話収録、要約／上野小麻里)

クルマナオキ建築設計事務所 来間直樹

(菊竹清訓建築設計事務所在籍期間／1989～94年)

菊竹さんは、建築に対し純粹で真摯な人。その分所員に対し厳しく、要求も高かったが、それに対峙できないと事務所に居ることができなかった。私も半ばで「菊竹学校」を中退することになる。しかし、菊竹さんの建築を信じる純真さによって、自分の「基準」を形成できたといえる。建物をつくることの責任は非常に重く、その「基準」は高くあらねばならないということを学んだ。「建築を頭でなく、身体全体で考える⁽¹⁾」ことは、現在の仕事の上で生きている。また、遠藤さん⁽²⁾には身近で建築をつくることの厳しさ教えてもらった。菊竹さんにも遠藤さんにも、時に可愛がってもらい、時に激しく怒られ、怒濤の日々だった。2006年、故郷米子市に戻り、風土や地域性が建築にあらわれなければいけないと考えるようになってきた。山陰の菊竹建築を見て、改めてそれを感じている。

菊竹さんは、今後二度とつくりえない建築をつくった建築家だと思う。絶対に諦めることはしなかったし、つくる意思の強さ。だからこそ、誰も見たことがなく、誰も想像できない建築ができた。どのような仕事でも凄まじい集中力で、新しいことを貪欲に取り入れようとする。それらは今でも自分の意識の根底にある。それがなければものがつくりえないだろうと考えている。

註

1. 2017年11月26日東光園にて開催された文化財登録記念シンポジウム「柱は空間に場を与え、床は空間を規定する」伊東豊雄基調講演より
2. 遠藤勝勲(建築家、遠藤勝勲建築設計室) 菊竹清訓建築設計事務所在籍期間／1955～94年

(2021年3月2日談話収録、要約／上野小麻里)

企画協力

塚本二郎建築設計事務所 塚本二郎

(菊竹清訓建築設計事務所在籍期間／1996～2010年)

菊竹清訓先生の言葉に、「星を見つけるには仮説がいる」というのがある。見つけたい星はこの辺りにあるであろうという「仮説」のもとに望遠鏡を覗くのでなければ、無数の星空の中から見つけたい星は発見することはできない。同様に展覧会づくりも「仮説」がなければ膨大な資料群から展示内容を纏め上げることはできない。縁あって作品の集積地となっている山陰の地でしかできない展覧会という「仮説」によって独自の展示に繋がったのではないだろうか。そして、何よりも先生自身が手がけた島根県立美術館で展覧会や関連イベントが開催されたことが意義深い。美術館の建物や、山陰の身近にある菊竹作品の資料などを通じて、それぞれの作品で考えたことやストーリーを知ってもらうことで、地域の建築そのもの、環境づくりに関心をもってもらうことができたのではないかと思う。

菊竹先生の足跡を振り返ることは、先生が人々や社会の幸福を願い、どのように建築で貢献できるかの模索への情熱と創造の喜びを知ることであり、同時にものごとの根源や真理、つまり「かわらないもの」を探求する精神を知ることではないだろうか。その姿勢や精神は時が移り変わっても、人のところに響くだろう。そして、今を生きる世代、次の世代の人がより良い未来につながる新しい発想・構想のきっかけをそこから見出すことができこそ、菊竹先生らしいアーカイブになるのではと思っている。

(2021年3月5日談話収録、要約／上野小麻里)

企画協力

あかるい建築計画共同代表 斎藤信吾

現在整理が進む菊竹アーカイブズの成果の一端が示される展示となり、《島根県立図書館》・《島根県立武道館》・《田部美術館》・《島根県立美術館》など、多数の貴重な原図等資料が「菊竹清訓 山陰と建築」で初公開された。模型も古いものから新しいものまで一体的に通覧できる内容となっている。島根で大規模な展覧会が開催されたことは、菊竹清訓著『建築のこころ』の冒頭にもあるように、建築を専門家のみならず幅広い方々に知ってもらう機会となったと考えている。これからも菊竹建築を大切に使い続けていく契機となることに期待したい。

菊竹建築の魅力を改めて考えてみると、半世紀も前になるその思想や方法論が、今の人たちにとっても非常に示唆に富むということが挙げられるだろう。一つは、社会に必要とされていることを建築にしていた点。それぞれの建築から統一的な「かたち」は見えにくいかもしれないが、実は個々の「かたち」を生み出す背景には、社会に何が必要であるかが常に考えられている。もう一つは、文化や歴史と現代の建築をどう接続しようとしたかという点。伝統的なものと新しいものとを並列させながら思考する、そのような部分が見え隠れするような、創造的な関連性のようなことが考えられていたのだろうと捉えている。

(2021年3月5日談話収録、要約／上野小麻里)

関連事業一覧

■記念講演会

「風景の建築家 菊竹清訓」

事前申込不要・参加無料

日時:2月7日[日]14:00-(13:30開場/約90分)

講師:千代 章一郎(島根大学 学術研究院

環境システム科学系 建築デザイン学コース教授)

会場:島根県立美術館ホール(95席/当日先着順)

▷通常の半分の定員で開催

■ワークショップA:けんちくカフェ

「Sky House New!! : みんなも菊竹先生になってみる」

事前申込・参加無料

内容:「スカイハウス(空の家)」は菊竹先生の代表作。

菊竹先生になったみんなは、どんな「スカイハウス」を
おうちに建てますか?

日時:2月28日[日]10:30-15:30

午前/設計図を描こう

午後/家建てよう ▷昼食各自

講師:千代 章一郎(島根大学 学術研究院

環境システム科学系 建築デザイン学コース教授)

対象:小学3年生以上 ▷小学生は保護者同伴

会場:島根県立美術館アートスタジオ、講義室

◎出来上がった作品は企画展「菊竹清訓 山陰と建築」会期中、
島根県立美術館ロビーに展示

■ワークショップB

「着せ替えドミノ」で 建築空間を組み立てよう!

事前申込・参加無料

内容:ペーパークラフト「着せ替えドミノ」を
使って、建築空間を組み立てます。

日時:3月21日[日]13:30-16:00

講師:高増 佳子(米子工業高等専門学校建築学科教授・
「着せ替えドミノ」考案者T*O)

対象:小学3~6年生 ▷保護者同伴

会場:島根県立美術館アートスタジオ、講義室

■オンラインパネルディスカッションI

「菊竹清訓のこころと手の記憶/ 山陰の建築への挑戦」

現在活躍する菊竹清訓建築設計事務所所員の
建築家たちとともに山陰の菊竹建築を読みとき、
菊竹清訓の人物像とその生き様に迫る。

パネリスト:

遠藤 勝勸 (建築家、遠藤勝勸建築設計室)

長谷川 逸子 (建築家、長谷川逸子・建築計画工房)

内藤 廣 (建築家、東京大学名誉教授)

コーディネーター:

斎藤 信吾 (建築家、あかるい建築計画)

You Tubeにて3月10日から公開

■オンラインパネルディスカッションII

「巨大な細部が宿すか? 菊竹清訓の建築を、 架構と加工の点から考える」

圧倒的なスケール!その構想力を実現してきた菊竹清訓の
技術への視座を、「架構」と「加工」ふたつの
キーワードをもとに3人の建築家と語り尽くす。

パネリスト:

福島 加津也 (建築家、東京都市大学教授)

森田 一弥 (建築家・左官職人、京都府立大学准教授)

秋吉 活気 (建築家、VUILD CEO)

コーディネーター:

本橋 仁 (建築史家、京都国立近代美術館特定研究員)

You Tubeにて3月7日から公開

■美術講座

「菊竹清訓 山陰と建築」

事前申込不要・参加無料

日時:3月14日[日]14:00-(13:30開場/約90分)

講師:河野 克彦(島根県立美術館専門学芸員・本展企画者)

会場:島根県立美術館ホール(95席/当日先着順)

▷通常の半分の定員で開催



■鑑賞ガイド

『松江の菊竹建築探訪』

発行者:島根県立美術館

発行年:2021年1月

執筆:井上 翔太(島根県土木部建築住宅課 主任技師)

■美術館キネマ

「だれも知らない建築のはなし」

鑑賞無料

石山友美監督/2015年/73分/ドキュメンタリー

石山友美監督オンライン舞台挨拶あり

日時:1月24日(日) ①10:30~ ②14:00~

(各回30分前開場)

会場:美術館ホール(95席/当日先着順)

▷通常の半分の定員で開催

出品目録

※展示期間の「前期」は1/22～2/15、「後期」は2/17～3/22、空欄は通期展示。
※概ね展示番号順に展示されていますが、一部異なる場合があります。

第1章 スカイハウスと初期の作品

展示番号	資料名等	作者名	制作年	素材・技法	大きさ(cm) 縦×横 奥行×幅×高さ	展示	所蔵
1	『こどもと住まい』(上) 住まいの図書館出版局	仙田満編著	1990年	図書	17.8×11.8		個人蔵
2	学生時代の課題 「Egypt Design」スケッチ	菊竹清訓	1947年頃	鉛筆、水彩、紙	27.2×38.5	前期	早稲田大学
3	学生時代の課題 スケッチ	菊竹清訓	1948年頃	鉛筆、水彩、インク、紙	27.1×38.1	前期	早稲田大学
4	学生時代の課題 スケッチ	菊竹清訓	1947-48年	鉛筆、水彩、紙	28.5×43.3	前期	早稲田大学
5	学生時代の課題 「山小屋の家具」スケッチ	菊竹清訓	1947-48年	鉛筆、水彩、インク、紙	27.3×38.1	前期	早稲田大学
6	学生時代の課題 スケッチ	菊竹清訓	1947-48年	鉛筆、水彩、紙	30.6×45.5	前期	早稲田大学
7	学生時代の課題 「中間駅試案」スケッチ	菊竹清訓	1948年頃	鉛筆、水彩、紙	27.1×39.3	後期	早稲田大学
8	学生時代の課題 「夏期組立貸住宅」スケッチ	菊竹清訓	1949年頃	鉛筆、色鉛筆、紙	26.2×38.3	後期	早稲田大学
9	学生時代の課題 「映画館試案」スケッチ	菊竹清訓	1949年頃	鉛筆、色鉛筆、紙	27.0×38.4	後期	早稲田大学
10	学生時代の課題 「Outdoor Sport」スケッチ	菊竹清訓	1949年頃	鉛筆、水彩、紙	27.1×39.4	後期	早稲田大学
11	学生時代の課題 「ABC Club」スケッチ	菊竹清訓	1948-49年	鉛筆、水彩、紙	27.0×38.4	後期	早稲田大学
12	広島平和記念カトリック聖堂 建築競技設計案 透視図の下書き	菊竹清訓	1948年	鉛筆、水彩、紙	54.4×76.3		情報建築
13	石橋文化センター・美術館 2階平面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1955年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	53.9×79.2		文化庁国立近現代建築資料館
14	石橋文化センター・美術館 北側・東側立面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1955年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	54.3×78.6		文化庁国立近現代建築資料館
15	永福寺幼稚園 立面図・断面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1955年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	54.1×78.6		文化庁国立近現代建築資料館
16	ブリヂストンタイヤ殿ヶ谷第一アパート 矩計図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1956年	インク、トレーシングペーパー	55.1×80.2		文化庁国立近現代建築資料館
17	ブリヂストンタイヤ殿ヶ谷第一アパート 平面詳細図 1:20	菊竹清訓建築設計事務所	1956年	インク、トレーシングペーパー	55.2×80.0		文化庁国立近現代建築資料館
18	スカイハウス 模型 1:30	制作：菊竹清訓建築設計事務所	1980年代	木	74.5×84.4×40.5		情報建築
19	スカイハウス 矩形図・立面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1957年	鉛筆、トレーシングペーパー	55.3×80.5		文化庁国立近現代建築資料館
20	スカイハウス 立面図・詳細図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1957年	鉛筆、トレーシングペーパー	54.7×80.3		文化庁国立近現代建築資料館
21	スカイハウス スケッチ	菊竹清訓	1957年	インク、トレーシングペーパー	113.0×72.0		情報建築
22	『平和記念広島カトリック聖堂 建築競技設計図集』洪洋社	広島カトリック教会編	1949年	図書	18.0×26.0		情報建築
23	実測スケッチ	菊竹清訓	1955年	インク、紙	29.2×21.0		情報建築
24	『H. P SHELLに関する模型実験報告』	早稲田大学理工学部 建築科谷研究室	1957年	図書	24.5×19.5		情報建築
25	スカイハウス 室内	川澄明男		写真	24.6×19.8	前期	情報建築
26	スカイハウス 室内	川澄明男		写真	24.4×20.1	前期	情報建築
27	スカイハウス 室内	川澄明男		写真	25.4×20.4	後期	情報建築
28	スカイハウス 室内	川澄明男		写真	20.5×25.4	後期	情報建築

第2章 メタボリズムと未来都市の構想

29	塔状都市 スケッチ	菊竹清訓	1958年	鉛筆、写真、トレーシングペーパー	41.4×33.2		情報建築
30	塔状都市 住宅ユニット断面平面検討図	菊竹清訓建築設計事務所	1958年	インク、トレーシングペーパー	41.9×33.5		情報建築
31	海上都市 スケッチ	菊竹清訓	1958年	コンテ、紙	46.0×36.0		情報建築
32	海洋都市うなばら 住宅ユニット・ムーバブルハウスダイアグラム	菊竹清訓	1960年	インク、コンテ、紙	40.0×27.0		情報建築

展示番号	資料名等	作者名	制作年	素材・技法	大きさ(cm) 縦×横×奥行×幅×高さ	展示	所蔵
33	海洋都市うなばら 全体図	菊竹清訓	1960年	鉛筆、トレーシングペーパー	19.0×30.5		情報建築
34	『メタボリズム 1960』美術出版社	川添登編	1960年	図書	21.0×20.4		情報建築
35	『メタボリズム 1960』美術出版社	川添登編	1960年	図書	21.0×20.4		個人蔵
36	世界デザイン会議 プログラム	世界デザイン会議日本運営会、 世界デザイン会議日本実行委員会	1960年	印刷物	22.2×10.3		情報建築
37	『世界デザイン会議議事録』美術出版社	世界デザイン会議議事録編集委員会	1961年	図書	24.0×24.0		個人蔵
38	東京湾計画 マスタープラン	菊竹清訓建築設計事務所	1961年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	58.4×82.7		情報建築
39	海上都市 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、トレーシングペーパー	27.8×21.0		情報建築
40	海上都市 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、トレーシングペーパー	18.0×23.0		情報建築
41	「都市計画と都市生活展 あなたの都市はこうなる」アルバム	菊竹清訓	1962年頃	アルバム	36.4×28.0		情報建築
42	海洋都市・海上都市 展示パネル	菊竹清訓建築設計事務所		印刷、パネル	90.0×90.0		情報建築
43	海上都市 全体計画模型	制作:植野石膏模型製作所	1963年	アクリル、木	95.0×105.0×7.5		情報建築
44	海上都市 模型	制作:植野石膏模型製作所	1990年頃	アクリル、石膏	62.0×62.0×88.5		情報建築
45	ハワイ海上都市 内側リング部分模型 1:200	制作:植野石膏模型製作所	1990年頃	アクリル、石膏	50.0×59.0×180.0		情報建築
46	ハワイ海上都市 ユニット見取図	菊竹清訓建築設計事務所	1971年	インク、紙	36.7×44.3		情報建築
47	『フローティング・マリーン・コミュニティ』ハワイ大学建築学科	クレイバン、菊竹、セント・デニス、 ブライア、ウィルキンス、バージェス	1972年	図書	21.3×35.0		情報建築
48	樹状住居 模型	制作:植野石膏模型製作所	1990年頃	アクリル	25.5×25.5×53.5		情報建築
49	スパイラル住居 模型	制作:植野石膏模型製作所	1990年頃	アクリル	19.0×19.0×55.0		情報建築
50	都心型住居 模型	制作:菊竹清訓建築設計事務所	1990年頃	アクリル	11.0×47.0×6.2		情報建築
51	「多摩田園都市展 あすの生活環境」ポスター	植松国臣	1966年	印刷物	103.3×73.2		情報建築
52	層構造モジュール コラージュ 緑化された人工地盤		2011年	印刷物	72.8×103.0		情報建築
53	アマゾン熱帯研究所 部分模型 1:150	制作:植野石膏模型製作所	1992年	アクリル	53.5×127.0×67.0		情報建築
54	『ペアシティ1966 構想計画報告書1』	菊竹清訓建築設計事務所	1969年	図書	30.2×21.3	前期	情報建築
55	『ペアシティ1970 構想計画報告書2』	菊竹清訓建築設計事務所	1969年	図書	30.2×21.3	後期	情報建築
56	『フローティング・インフラカセット計画案』	菊竹清訓建築設計事務所	1978年頃	印刷物	21.0×29.7	2枚 前期	情報建築
57	『フローティング・ラグジュアリー・ホテル計画案』	菊竹清訓建築設計事務所	1977年	印刷物	21.0×30.0	後期	情報建築
58	層構造モジュール 耐火実験の様子		1973年	写真	12.9×18.0	前期	情報建築
59	層構造モジュール 耐火実験の様子		1973年	写真	10.4×16.4	前期	情報建築
60	層構造モジュール 耐火実験の様子		1973年	写真	12.9×18.0	前期	情報建築
61	層構造モジュール 耐火実験の様子		1973年	写真	12.9×18.0	前期	情報建築
62	層構造モジュール 耐火実験の様子		1973年	写真	12.9×18.0	前期	情報建築
63	層構造モジュール 耐火実験の様子		1973年	写真	12.9×18.0	前期	情報建築
64	『つくば国際科学技術博覧会政府館構想』	計画連合	1982年頃	印刷物	21.1×19.7	後期	情報建築
65	『つくば国際科学技術博覧会政府館構想』	計画連合	1982年頃	写真	13.0×18.0	後期	情報建築
66	日本万国博覧会 エキスポタワー	撮影:新建築社写真部、画像提供:DAAS	1970年	—	—	—	—

展示番号	資料名等	作者名	制作年	素材・技法	大きさ(cm) 縦×横 奥行×高さ	展示	所蔵
67	沖縄国際海洋博覧会 アクアポリス	画像:沖縄国際海洋博覧会協会	1975年	—	—	—	—
68	国際科学技術博覧会 Bブロック外国展示館	撮影:新建築社写真部	1985年	—	—	—	—
69	なら・シルクロード博覧会 春日野会場シンボルタワー	撮影:新建築社写真部	1988年	—	—	—	—
70	2005年日本国際博覧会 グローバルループ	画像提供:地球産業文化研究所	2005年	—	—	—	—
71	日本万国博覧会 エキスポタワー 立面図 1:30	菊竹清訓建築設計事務所		複製	—		情報建築
72	沖縄国際海洋博覧会 アクアポリス 模型 1:100	制作:三菱重工業	1975年	鉄	142.0×142.0×53.5		情報建築

「1/1スケール模型 スカイハウスの屋根」

73	「1/1スケール模型 スカイハウスの屋根」	設計:島根県+太陽工業 制作・設置:太陽工業 他	2021年	ビニル膜、アルミニウム型材、 スチールワイヤー、鉄骨	規模:延面積104.04㎡ (10.2m×10.2m)		島根県
74	「サクラクレヨン」サクラクレバス			—	—		情報建築
75	「ダーマトグラフ」三菱鉛筆			—	—		情報建築
76	サングラス			—	—		情報建築
77	九州国立博物館 外観		2006年	写真	8.9×12.7		情報建築

第3章 山陰の建築

78	『島根県庁周辺整備誌』	島根県	1972年	図書	30.0×21.6		個人蔵
79	『島根県庁周辺整備状況写真集』	島根県	1972年頃	アルバム	32.7×28.8		島根県
80	『日本建築学会応募作品資料』	島根県	1971年頃	印刷物	26.7×19.7		情報建築
81	島根県立博物館 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、トレーシングペーパー	34.0×47.5		文化庁国立近現代建築資料館
82	『島根県立博物館計画案』	菊竹清訓建築設計事務所	1957年	印刷物	31.0×32.0		島根県
83	『島根県立博物館工事』	菊竹清訓建築設計事務所	1958年	アルバム	33.2×27.3		島根県
84	島根県立博物館 模型 1:100	制作:菊竹清訓建築設計事務所	1957年頃、 1968年頃	紙、木	19.5×38.5×11.5、 19.0×22.5×13.6		情報建築
85	島根県立博物館 一般図 1:200	菊竹清訓建築設計事務所	1957年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	54.2×80.0		文化庁国立近現代建築資料館
86	島根県立博物館 矩計図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1957年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	56.7×81.8		文化庁国立近現代建築資料館
87	島根県立博物館 ルーバーウォール詳細図 1:10	菊竹清訓建築設計事務所	1957年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	56.8×81.8		文化庁国立近現代建築資料館
88	島根県立博物館 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー	29.0×41.8	後期	情報建築
89	島根県立博物館 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、色鉛筆、紙	19.3×24.0		情報建築
90	島根県立博物館 スケッチ	菊竹清訓	1957年	鉛筆、トレーシングペーパー	30.5×41.9	前期	情報建築
91	島根県立博物館 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー	26.9×26.0	前期	情報建築
92	島根県立博物館 スケッチ	菊竹清訓	1957年	鉛筆、トレーシングペーパー、紙	13.6×25.4	後期	情報建築
93	『近代建築』第14巻第1号		1960年1月	雑誌	24.3×25.8	前期	情報建築
94	『建築文化』第15巻第1号		1960年1月	雑誌	33.3×25.2	後期	個人蔵
95	島根県立図書館 1階平面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1967年	鉛筆、トレーシングペーパー	84.0×119.0		文化庁国立近現代建築資料館
96	島根県立図書館 断面詳細図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1968年	鉛筆、トレーシングペーパー	58.0×116.0		文化庁国立近現代建築資料館

展示番号	資料名等	作者名	制作年	素材・技法	大きさ(cm) 縦×横×奥行×幅×高さ	展示	所蔵
97	島根県立図書館 スケッチ	菊竹清訓		インク、トレーシングペーパー	42.2×82.3		文化庁国立近現代建築資料館
98	島根県立図書館 子供用椅子 大	菊竹清訓建築設計事務所	1968年	木	38.3×33.5×67.8		島根県立図書館
99	島根県立図書館 子供用椅子 小	菊竹清訓建築設計事務所	1968年	木	36.5×35.0×64.0		島根県立図書館
100	島根県立図書館 喫茶室椅子		1968年	木(3脚)	39.8×39.8×39.8		島根県立図書館
101	島根県立図書館 模型 1:100	制作:島根大学	2021年	木、紙、その他	100.0×72.0×14.0		島根県立美術館
102	島根県立武道館 模型 1:100	制作:島根大学	2021年	木、紙、その他	100.0×72.0×17.5		島根県立美術館
103	島根県立武道館 矩計図A 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1969年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	58.0×111.5		文化庁国立近現代建築資料館
104	島根県立武道館 矩計図B 1:50・1:20	菊竹清訓建築設計事務所	1969年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	58.0×110.0		文化庁国立近現代建築資料館
105	『島根県庁周辺部地域冷暖房計画案』	菊竹清訓建築設計事務所	1969年	図書	29.7×21.3	後期	情報建築
106	『島根県庁周辺整備に関する覚書』	菊竹清訓建築設計事務所	1969年	図書	29.3×20.7	前期	情報建築
107	『島根県立図書館新築工事』	菊竹清訓建築設計事務所	1967年頃	印刷物	63.0×43.0	前期	島根県
108	『図書館建築記録 No.2』		1967-68年	アルバム	32.3×28.0	後期	島根県立図書館
109	島根県立図書館 スケッチ	菊竹清訓	1968年	インク、トレーシングペーパー	22.0×25.7		情報建築
110	島根県立美術館 外構スケッチ	菊竹清訓	1998年頃	色鉛筆、トレーシングペーパー	42.0×77.8		情報建築
111	島根県立美術館 模型 1:400	制作:植野石膏模型製作所	1998年	アクリル	79.5×79.5×4.0		島根県立美術館
112	田部美術館 矩計図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1978年	鉛筆、トレーシングペーパー	58.0×85.2		情報建築
113	田部美術館 矩計図・コールテン鋼パネル詳細図 1:20	菊竹清訓建築設計事務所	1978年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	84.3×119.3		情報建築
114	田部美術館 1階平面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1979年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.2×84.0	前期	情報建築
115	田部美術館 2階平面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1978年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.4×84.0	後期	情報建築
116	出雲大社 庁の舎 模型 1:50	制作:早稲田大学	2006年	木、その他	49.0×123.0×22.0		情報建築
117	出雲大社 庁の舎 矩計図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1961年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	56.5×106.1		文化庁国立近現代建築資料館
118	出雲大社 庁の舎 1階平面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1961年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	56.2×106.2		文化庁国立近現代建築資料館
119	『田部長右衛門(朋之)先生追悼録』山陰中央新報社	田部長右衛門(朋之)先生追悼録刊行委員会	1981年	図書(2冊)	26.2×18.8		個人蔵
120	『週刊朝日』第69巻第16号		1964年4月	雑誌	25.8×18.1		個人蔵
121	『出雲大社庁の舎計画案』	菊竹清訓建築設計事務所	1960年	印刷物	31.5×30.5		情報建築
122	出雲大社 庁の舎 スケッチ	菊竹清訓		鉛筆、トレーシングペーパー	48.0×82.0		文化庁国立近現代建築資料館
123	出雲大社 庁の舎 メモ	ルイス・カーン		インク、紙	10.9×12.8		情報建築
124	メモと菊竹の手	安藤毅	2004年	写真	10.8×8.6		情報建築
125	ルイス・カーンの肖像			写真	24.0×19.2		情報建築
126	出雲大社 神社殿 断面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1980年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.0×84.5		情報建築
127	出雲大社 神社殿 一般図 1:200・1:600	菊竹清訓建築設計事務所		インク、トレーシングペーパー	60.0×84.2		情報建築
128	ホテル東光園 模型 1:100	制作:米子工業高等専門学校	2021年	木、塩化ビニール、その他	53.0×75.0×32.5		島根県立美術館
129	ホテル東光園 矩計図A 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1964年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	74.6×109.2		情報建築
130	ホテル東光園 矩計図B 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1964年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	75.4×109.1		情報建築
131	ホテル東光園 1階平面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1964年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	71.8×109.7		情報建築

展示番号	資料名等	作者名	制作年	素材・技法	大きさ(cm) 縦×横 奥行×幅×高さ	展示	所蔵
132	境港マリーナホテル 3・4階平面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1984年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.5×84.2		情報建築
133	境港マリーナホテル PH階平面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1984年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.9×84.4		情報建築
134	境港マリーナホテル 断面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1984年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.9×84.1		情報建築
135	萩市民館 天井図B 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1967年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	84.6×115.6		文化庁国立近代建築資料館
136	萩市民館 矩計図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1967年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	84.3×114.3		文化庁国立近代建築資料館
137	萩市民館 鉄骨軸組	菊竹清訓建築設計事務所	1968年	鉛筆、トレーシングペーパー	60.5×79.5		文化庁国立近代建築資料館
138	萩市民館 模型 1:100	制作:菊竹清訓建築設計事務所	1968年頃	木、その他	64.8×125.0×21.3		情報建築
139	萩市庁舎 矩計図・シャフト詳細図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1973年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	84.1×115.0		情報建築
140	萩市庁舎 1階平面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1973年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	84.0×84.0		情報建築
141	萩市庁舎 2階平面図 1:100	菊竹清訓建築設計事務所	1973年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	83.6×84.6		情報建築
142	「島根県立武道館」『新建築』第45巻第10号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1970年10月	雑誌	29.1×21.6	前期	情報建築
143	「田部美術館」『新建築』第55巻第7号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1980年7月	雑誌	29.1×21.6	後期	情報建築
144	「現代建築をつくるために」『新建築』第38巻第9号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1963年9月	雑誌	29.7×22.0	前期	情報建築
145	「出雲大社 神社殿」『新建築』第57巻第11号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1982年11月	雑誌	29.1×21.6	後期	情報建築
146	「ホテル東光園」『新建築』第40巻第4号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1965年4月	雑誌	29.7×22.7	前期	情報建築
147	「境港マリーナホテル」『新建築』第61巻第9号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1986年9月	雑誌	29.1×21.6	後期	情報建築
148	『建築文化』第267号		1969年1月	雑誌	33.4×25.4	前期	個人蔵
149	「萩市庁舎」『建築文化』第348号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1975年10月	雑誌	33.2×25.3	後期	個人蔵

第4章 方法と作品

150	国立国際会館設計競技案 模型 1:100	制作:早稲田大学	2011年	木、アクリル	100.0×190.0×43.5		早稲田大学
151	国立国際会館設計競技案 パース検討図	菊竹清訓	1963年	鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー	43.0×117.3		情報建築
152	国立国際会館設計競技案 スケッチ	菊竹清訓	1963年	鉛筆、色鉛筆、インク、紙、トレーシングペーパー、写真	25.0×17.7	前期	情報建築
153	国立国際会館設計競技案 スタディ模型	松井源吾、 制作:菊竹清訓建築設計事務所	1963年	木、ボール紙、その他	—	後期	情報建築
154	設計の三段階のアプローチ検討図	菊竹清訓	1963年頃	色鉛筆、紙	20.0×14.7		情報建築
155	設計の三段階のアプローチ検討図	菊竹清訓	1963年頃	インク、鉛筆、紙	25.0×17.7	前期	情報建築
156	設計の三段階のアプローチ検討図	菊竹清訓	1963年頃	インク、鉛筆、紙	25.0×17.7	前期	情報建築
157	国立国際会館設計競技案 メモ	菊竹清訓	1963年頃	インク、色鉛筆、鉛筆、紙(12枚)	25.0×17.7	後期	情報建築
158	『国立国際会館設計競技図書』	菊竹清訓建築設計事務所	1963年	印刷物	41.3×31.3		情報建築
159	『建築』第15号		1961年11月	雑誌	29.6×22.4	前期	情報建築
160	「菊竹清訓/作品と方法2」『建築』第36号(抜刷)	菊竹清訓建築設計事務所	1963年9月	雑誌	29.5×22.5	後期	情報建築
161	パシフィックホテル茅ヶ崎 4~9階平面図 1:200	菊竹清訓建築設計事務所	1965年	鉛筆、トレーシングペーパー	53.0×79.0	前期	文化庁国立近代建築資料館
162	パシフィックホテル茅ヶ崎 ムーブメント外皮詳細図 1:4	菊竹清訓建築設計事務所	1965年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	53.5×79.0	後期	文化庁国立近代建築資料館
163	パシフィックホテル茅ヶ崎 立面図 1:200	菊竹清訓建築設計事務所		鉛筆、トレーシングペーパー	39.5×115.3		文化庁国立近代建築資料館

展示番号	資料名等	作者名	制作年	素材・技法	大きさ(cm) 縦×横 奥行×幅×高さ	展示	所蔵
164	都城市民会館 矩計図A 1:50	菊竹清訓建築設計事務所	1964年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	59.9×98.0		情報建築
165	都城市民会館 模型 1:70	制作:植野石膏模型製作所	1964年頃、 1996年	木、その他	95.0×145.0×44.7		情報建築
166	パサディナハイツ 断面図 1:50	菊竹清訓建築設計事務所		鉛筆、インク、トレーシングペーパー	58.0×84.1		情報建築
167	パサディナハイツ アクソメ	菊竹清訓建築設計事務所		鉛筆、トレーシングペーパー	63.9×84.5		情報建築
168	黒石ほるぶ子ども館 矩計図 1:20	菊竹清訓建築設計事務所	1974年	鉛筆、インク、トレーシングペーパー	58.4×84.2		情報建築
169	東京都江戸東京博物館 スケッチ	菊竹清訓	1987年	インク、トレーシングペーパー	42.2×89.5		情報建築
170	東京都江戸東京博物館 スケッチ	菊竹清訓	1988年	インク、紙	59.1×87.8	前期	情報建築
171	東京都江戸東京博物館 断面パース	菊竹清訓建築設計事務所		印刷物	59.1×112.5	後期	情報建築
172	東京都江戸東京博物館 模型 1:300	制作:植野石膏模型製作所	1990年頃	アクリル	60.0×114.8×22.3		情報建築
173	作品年表	菊竹清訓	2008年	クレヨン、インク、紙、印刷物	42.3×58.2		情報建築
174	「サクラクレヨン」サクラクレパス			—	—		情報建築

上映映像

映像1	「菊竹清訓のこぼし」 (約6分)	企画・制作:島根県立美術館 2021年 編 集:井上翔太(島根県土木部建築住宅課)
映像2	「カンガルーの家」1960年、 「ムーブネットの家」1960年 (抜粋/約16分)	製 作:株式会社 映画TV中央プロダクション 株式会社 同盟広告社 再編集:島根県立美術館 2021年 協 力:株式会社 情報建築
映像3	島根県立博物館(現・島根県庁第三分庁舎)建設工事記録撮影 (約9分)	企画・制作:島根県立美術館 2021年 協 力:株式会社 情報建築、島根県教育庁文化財課
映像4	「出雲大社 庁の舎」1963年 (抜粋/約6分)	製 作:大成建設株式会社 製作担当:産業技術映画協会 再編集:島根県立美術館 2021年 協 力:大成建設株式会社
映像5	「出雲大社 神祇殿」1981年 (抜粋/約5分)	監 修:菊竹清訓 企 画:大成建設株式会社 製 作:真映社 再編集:島根県立美術館 2021年 協 力:大成建設株式会社
ロビー	菊竹清訓建築設計事務所元所員によるオーラルストーリー (約19分)	遠藤勝勲(建築家、遠藤勝勲建築設計室) 内藤廣(建築家、東京大学名誉教授) 長谷川逸子(建築家、長谷川逸子・建築計画工房) 聞き手:斎藤信吾(建築家、あかるい建築計画) 企画・制作:島根県立美術館 2021年 協 力:文化庁国立近現代建築資料館

紹介建築目録

※本目録の作成にあたっては、菊竹清訓編著『菊竹清訓作品集1「型」の展開』求龍堂、1990年を参考にした。

1章 スカイハウスと初期の作品

永福寺幼稚園

竣工年/1956年
所在地/福岡県久留米市(現存せず)
建築主/ブリヂストンタイヤ
施工/古川定

ブリヂストンタイヤ殿ヶ谷第一アパート

竣工年/1956年
所在地/神奈川県横浜市(現存せず)
建築主/ブリヂストンタイヤ
施工/大日本土木

石橋文化センター・美術館 (現・久留米市美術館)

竣工年/1956年
所在地/福岡県久留米市
建築主/ブリヂストンタイヤ
構造指導/早大谷資信構造研究室
施工/ブリヂストンタイヤ臨時建設部

スカイハウス

竣工年/1958年
所在地/東京都文京区
建築主/菊竹清訓
構造/早大谷資信構造研究室
施工/白石建設

2章 メタボリズムと 未来都市の構想

日本万国博覧会 エキスポタワー

竣工年/1970年
所在地/大阪府吹田市(現存せず)
建築主/日本万国博覧会協会
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/建築設備設計研究所
施工/大成建設・鹿島建設・竹中工務店・大林組・清水建設共同企業体

沖縄国際海洋博覧会 アクアポリス

竣工年/1975年
所在地/沖縄県国頭郡(現存せず)
建築主/日本国政府・沖縄国際海洋博覧会協会
設計/菊竹清訓建築設計事務所、三菱重工業
協力/色彩計画 田中一光
タピストリー 粟辻博
VIP区画インテリア 渡辺力+Qデザイナーズ
モニュメント 飯田善国
建造/三菱重工業

国際科学技術博覧会 Bブロック外国展示館

竣工年/1985年
所在地/茨城県つくば市(現存せず)
建築主/国際科学技術博覧会協会計画建設部
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/総合設備計画
施工/佐藤工業共同企業体(B-1工区)
戸田建設共同企業体(B-2工区)

なら・シルクロード博 春日野会場シンボルタワー

竣工年/1988年
所在地/奈良県奈良市(現存せず)
博覧会主催/奈良県、奈良市、NHK
施工/鹿島・フジタ共同企業体

2005年日本国際博覧会 グローバル・ループ

竣工年/2005年
所在地/愛知県愛知郡長久手市
統括/2005年日本国際博覧会協会
設計/菊竹清訓建築設計事務所、
環境システム研究所設計共同体
施工/I工区:大林・鴻池・鉄建・矢作共同企業体
II工区:清水・東急・大木・徳倉共同企業体
III工区:鹿島・飛鳥・ベクトル・名工共同企業体

3章 山陰の建築

島根県立博物館 (現・島根県庁第三分庁舎)

竣工年/1958年
所在地/島根県松江市
建築主/島根県
構造/早大谷資信構造研究室
施工/鴻池組

島根県立博物館 増築 (現・島根県庁第三分庁舎)

竣工年/1969年
所在地/島根県松江市
建築主/島根県
構造/早大谷資信構造研究室
設備/建築設備設計研究所
施工/鴻池組山陰支店

島根県立図書館

竣工年/1968年
所在地/島根県松江市
建築主/島根県
構造/松井源吾構造研究室
設備/早大井上宇市設備研究室・
大滝設備事務所
協力/照明器具 石井幹子
機能検討 菅原峻
施工/竹中工務店広島営業所

島根県立武道館

竣工年/1970年
所在地/島根県松江市
建築主/島根県
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/JES都市設備研究所、昭和設備事務所
協力/板戸文字 田部長右衛門
施工/竹中工務店

田部美術館

竣工年/1979年
所在地/島根県松江市
建築主/田部長右衛門、田部智久
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/設備計画、工学院大水野宏道研究室
協力/マーク・文字 田中一光
施工/清水建設

島根県立美術館

竣工年/1998年
所在地/島根県松江市
建築主/島根県
構造/田中輝明建築研究所
設備/建築設備設計研究所
協力/館名ロゴ・サイン・色彩計画
田中一光デザイン室
仮囲いデザイン スタジオコンパッソ
情報システム整備 山陰中央テレビジョン放送
鉄骨溶接指導 木村富夫、岡林勝範
(武蔵工業大学)
施工/鴻池組・松江土建特別共同企業体

出雲大社 庁の舎

竣工年/1963年
所在地/島根県出雲市(現存せず)
建築主/出雲大社復興奉賛会
構造/早大松井源吾構造研究室
設備指導/川合健二
協力/グリラル 粟津潔
棟札 岩田藤七
造園 流政之
家具 大和勝太郎
施工/大成建設

出雲大社 神祇殿

竣工年/1981年
所在地/島根県出雲市
建築主/出雲大社
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/設備計画、早大井上宇市設備研究室
協力/展示計画監修 武者英二
神紋・館名銘板 尾川宏
照明 菊竹清文
施工/大成建設

ホテル東光園

竣工年/1964年
所在地/鳥取県米子市
建築主/東光園
構造/早大松井源吾構造研究室
設備/早大井上宇市設備研究室・
大滝設備事務所
協力/室内・グラフィックデザイン 粟津潔
装飾照明 向井良吉
家具 水の江忠臣、
菊竹清訓建築設計事務所
造園 流政之
施工/熊谷組(施工協力/八田建設)

境港マリーナホテル

竣工年/1985年
所在地/鳥取県境港市
建築主/境港マリーナホテル
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/設備設計、木内設備計画研究所
協力/家具 大友洋佑ファニチャー・
インテリア・建築設計事務所
施工/大林組

萩市民館

竣工年/1968年
所在地/山口県萩市
建築主/萩市
構造/松井源吾構造研究室
設備/早大井上宇市設備研究室
協力/緞帳 田中一光
レリーフ 粟辻博
照明 石井幹子
音響指導 NHK総合技術研究所
施工/奥村組

萩市庁舎

竣工年/1974年
所在地/山口県萩市
建築主/萩市
設計/菊竹清訓建築設計事務所、
堀啓一建築設計事務所
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/設備計画、早大井上宇市設備研究室
協力/音響 永田穂建築音響設計事務所
施工/古谷・松村・奥村共同企業体

4章 方法と作品

パシフィックホテル茅ヶ崎

竣工年/1966年
所在地/神奈川県茅ヶ崎市(現存せず)
建築主/日本観光開発
構造/松井源吾構造研究室
設備/桜井建築設備研究所
協力/色彩 田中一光
家具 丸紅飯田
施工/島藤建設

都城市民会館

竣工年/1966年
所在地/宮崎県都城市(現存せず)
建築主/都城市
構造/松井源吾構造研究室
設備/早大井上宇市設備研究室
協力/色彩 粟津潔
アルミ緞帳 伊藤隆道
音響指導 NHK総合技術研究所
ストンスピーカー(彫刻) 田中充秋
ストンスピーカー(音楽) 秋山邦晴
ストンスピーカー(音響) 奥山重之助
施工/鹿島建設九州支店

パサディナハイツ

竣工年/1974年
所在地/静岡県三島市
建築主/大都リッチランド
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備規模/設備計画、早大井上宇市設備研究室
施工/戸田建設

黒石ほるぷ子ども館

竣工年/1975年
所在地/青森県黒石市
建築主/ほるぷ図書販売
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/設備計画、工学院大水野宏道研究室
協力/シンボル彫刻「ほるぷレーダー」伊藤隆道
棟飾りとイラスト 菊竹かずみ
リンゴのカーペット 植松国臣
施工/大長建設

東京都江戸東京博物館

竣工年/1992年
所在地/東京都墨田区
建築主/東京都
構造/松井源吾+O.R.S.事務所
設備/森村共同設計事務所
協力/防災計画指導 星野昌一
音響計画 伊藤毅
照明計画 石井幹子
風洞実験 転報輪圭
トータルシステム・搬送システム 合田周平
ロボット 加藤一郎、長谷川幸男
屋内環境制御 石井威望、石福昭
材料計画指導 田村恭
鉄骨指導 木村富夫
施工/鹿島・鉄建・銭高・村本・松村・東亜健・
坂田・井上・岡本建設共同企業体

九州国立博物館

竣工年/2004年
所在地/福岡県太宰府市
事業体/文化庁、福岡県、
九州国立博物館設置促進財団
設計/菊竹・久米設計共同体
構造/菊竹・久米設計共同体
設備/菊竹・久米設計共同体
協力/博物館計画 半澤重信
照明計画 近田玲子デザイン事務所
植栽計画 宮脇昭 前田文和
積算 館建築積算事務所
施工/I工区 鹿島・間・
高松特定建設工事共同企業体
II工区 大成・西松・
松尾特定建設工事共同企業体

※「1/1スケール模型 スカイハウスの屋根」内
(写真展示)

菊竹清訓 山陰と建築

[展覧会]

企画：

河野克彦(島根県立美術館)

上野小麻里(島根県立美術館)

企画協力：

斎藤信吾(あかるい建築計画)

塚本二郎(塚本二郎建築設計事務所)

山本大輔(島根県東部県民センター出雲事務所)

井上翔太(島根県土木部建築住宅課)

[カタログ]

編集：

河野克彦

上野小麻里

編集協力：

山本大輔

井上翔太

執筆：

河野克彦

上野小麻里

山本大輔

千代章一郎(島根大学教授)

荻晋彦、古澤太晟、片岡千明、小嶋優実、伊久夢乃、水田日和、植田歩夢、藤原育子、槇山公喜(島根大学)

永田孝一(米子工業高等専門学校)

デザイン：野津敏靖(野津デザイン事務所)

印刷・製本：島根印刷

発行：島根県立美術館

発行日：2021年3月30日

© 2021 Shimane Art Museum

